

返へして、其れより東折してマツソワに向ひぬ。ゴンダアルを出で、よりは、所稱俘の境涯を免れたるも、雪中の山路に困難を極め、且つは隨處にアビシニア兵の爲にまた地方の民の爲にあらふる虐待を蒙り、境を出づるに臨むでまたく拘留されしが、纔に金を散じて免るゝを得たり。ゴルドンの書信に曰く、足もとに一人左右に各一人づゝアビシニア人を置き、眠るは、あまり快よきものにあらず、アビシニアに於ける余が最後の一夜は斯くして過ぎぬ」と、また曰く、アビシニア人は意外に力ある者共なり、風俗は剛毅質朴、頓斗浮誇の風なく、未開の民の常癖なる術氣虚飾を帯びず、倔強なる軍人種族なり、訓練は更になきも信心篤き熱信種族なり」と、また曰く、アビシニア王は醇乎たるパリサイ宗徒なり、王の談話は宛ながら舊約書を讀むが如く、昨夜爛醉して今朝は起きて詩篇を讀む。英國に在らば祈禱會をかゝさず、カパン大の聖書を所持する。ならん」と、吾を苦むる者の好所をも見出し、死生の際にも微妙の觀察を、

なす、心の彈力強きはゴルドンの一特質なり。

斯くてゴルドンは散々に艱苦屈辱を嘗め盡したるアビシニアの境を越へて、十二月八日マツソワに着し見れば、電報にて埃及王に促し置きし軍艦は影もなし、ゴルドンも打腹立ち、電報もて埃及王に一棒を獻じ、折よく來合はせたる英國の一砲艦に打乗りてマツソワを發し、カイロ府に著して腹命を終るより早く、辞表を突出して歸國の途に上りぬ。時に一八七九年十二月なり、薄弱なるチウフイック王が一片の埃撈を述べたるのみ、カイロの内外人は此不可思議なる「狂漢」の退職を微晒して目送しぬ。

前三年、後三年、合はせて六年の蘇丹經營に、心を碎き根を竭して十年の生命を縮めたる報は何ぞ。内外の隱謀に、二枚舌に、私曲に、因循に、凡てのものに壓きたるゴルドンは再び蘇丹の土を踏まじと足の塵を拂ひて（隱謀、二枚舌、私曲、因循は、ゴルドンの背に鹽を投げて）去りぬ、あゝ、ゴルド

ソは去りぬ然れども蘇丹の縁は未だ絶へざるなり蘇丹の土はゴールド
ソの骨を舂まざればあへて休せざるなり。

第十章

東走西奔

一八八〇年の初、ゴールドン大佐は英國に歸り、サウザムプトン及チエル
シアにありける其母及姉妹兄弟の家に暫らく游息して、連宵の情話に
積年の勞を慰し、程なく瑞西に赴き、蘇丹の烈日熱砂に焦れし眼と腦と
を瑞西の氷雪に冷やさむと試みぬ。蘇丹の六年は殆ど、ゴールドンを殺し
ぬ。さきに埃及を辞して歸國の途に上らんとするや、亞歷山港に於て、英
醫某ゴールドンを一診して大に驚き、神經衰弱し血液變りて皮膚に紫斑
を生ず、全く間斷なき疲勞、心痛、不消化物食用の結果なり、今後數ヶ月は
一切世累を絶ちて十分靜養し、滋養をとられよ、と切に勸告したれば、ゴ

ルドンも之に従ひて其静養と云ふものを試みひと瑞西山中に来りしなり。

然るに「静」とゴールドンとは終生仲悪しくして、此年三月ラウザン湖邊に滞在中、南阿布利加より一通の電報來り、喜望岬殖民地の軍隊司令官にあり呉れまじきやとなり。英國の南阿經營は實に一朝一夕の事にあらず、已に此前年にもズルー征伐を行ひ、今年又まさにはバストランドに事あらむとして、即ちゴールドンの助力を依頼し來れるなり。此等は皆近來のトランスヴァール併呑の序幕、道行とも云ふ可きものとす。ゴールドンは、單に軍隊司令官と云ふに止まらず、バストランド經營の任を托せむことを要求したるも、折合はずして、終に其まゝになりぬ。然も所謂静養の時期は永からず、此年四月保守黨内閣倒れ、グラッドストーン内閣組織の結果、新に印度太守となりたるリボン卿はゴールドン大佐に向つて秘書官たらんことを求め、ゴールドンも不圖其氣になりて、之を諾しぬ。印度

太守の秘書官は、其の人によりては、總理大臣の勢力をも振ひ得可き位置あり。此撰任は印度を知り、ゴールドンを知れる人々を駭かしぬ。ゴールドンも諾して間もなく失策を曉りぬ。リボン卿は熱信なる天主教徒、ゴールドンと宗旨の相違こそあれ、清廉にして氣節あり、尤もゴールドンと話の合ふ可き人物なり。然りながら、元來英領印度は一種特別の情實と、慣習と、黨派とによりて成立したるビザの塔の如く歪める大建物にして、默坐すれば即ち可、若し其歪めるを建直さむとせば、己れ先づ潰るゝか、塔其ものが崩るゝか、何れとも無事ある氣遣ある可からず。ゴールドン傳の著者フォルブス氏が言へるが如く、ゴールドンの印度に入るは、牡牛の瀬戸物屋に飛び込みたるあり。牡牛は廣大なる青草の牧場に駆けしめよ。ゴールドンの如く最短距離の直線をとつて驀地に突進する人、ゴールドンの如く世間の毀譽情實利害習慣故例等を塵芥視して直ちに事物の根抵を見眞價を判する人、ゴールドンの如く弱きをば憐れみて然も惡を惡

ひの念は烈火の如く熾なる人、ゴルドンの如く命令を受けずして自から命令する人、馴れたる曲馬場裡の馬の足並美しく一定の區劃を走るが如くならずして羈絆を知らず羈絆を容さぬ荒駒の鬣を振ふて高く嘶きつゝ長草巨岩蹄に任せて飛躍して行くにも比しつ可き人、要するに恐ろしきまで眞面目なる、不羈なる、斬新ある也。是一個の天才を、情實世界の印度に投げ込みて、太守となす已に不可なり、況んや羈絆の下に吏務鞅掌する一個の秘書官たらしむるをや、新任印度太守秘書官は太守と共に英國を發して、印度に向ふ途中、亞丁の船中に於て斯く認めぬ。

一八八〇年、五月廿二日亞丁港外に於て。

余は馬鹿なりき、而してリボン卿の下に此位置を受けぬ。卿は懇切にして思ひやりある長官なり、然れども余は印度を悪くむ。如何なれば此位置に就きたりしか、自から了解しかぬるなり。誰の話も聞いても印度には限りなき争鬭の行はるゝ由、人をして嘔吐を催ふさしむ。余

は可成的速やかに去る可し。

果然、ボムベイに着きて三日目に、ゴルドンは其職を辞しぬ。辞職の理由は左の書翰に明らかなり。

一寸したはづみに、小生はうつかり新印度太守秘書官の任命を受け申候。孟買に上陸するや否や、小生の様な無責任の位置にありては、到底當地根生ひのいろくの勢力を向ふに立て、實際此と云ふ程の仕事をする望なきを、小生は認め申候。其と見たる故、猶又小生の意見は、官吏社會の意見と異なるで反對なるを見たる故、(註、他の書翰に、油の水、小生と彼官吏社會の人々も、まじり合ふ可く候、と書けり。)小生は辞職致し候。リボン卿の位置につきては、實に小生も大分遠慮致したる次第に候。或人々は、小生の意見即ち太守の意見とさめてしまふ者も有之、小生はいよゝゝ太守の下に留任するは太守に累を及ぼす譯と感じ候。太守と小生は至極の仲よしにて相別れ候。小生が辞職の唐突なる、是亦已むを得ざる次第に候。

何となれば少時にもせよ任に在れば、知るまじき——終に辭職を決した上からは——國家の機密を知るが故に候。成程小生も一二ヶ月留まりて、手の痛みでもして(註、實際の理由を隠す口實に、手が痛む故云)穩やかに去りても宜敷様なものなれ共、全体役目がいやでたまらず、世間の評判は何とあらふども、其方は可なり無頓着の小生故、いつそ直ぐ辭職が宜敷と存じたる次第に候。

秘書官を辭して自由の身となりたれば、いでや阿布利加の東岸、ザンジバルに赴き、其君を助けて奴隸貿易征伐を行はむと思案せる時しも、辭職より二日目に、一通の電報支那よりかゝりぬ。差出人はゴルドンの舊友、總稅務司ロバート、ハート氏、余は貴下を當國に招く可き命を受けぬ、請ふ貴下自ら來りて見よ、斯大仕掛なる眞個有益の事業を爲すの機會を逸す可からず、事業地位條件等は一切當地にて貴望に應じ決定す可しとの文言なり。蓋し清領トルキスタンのカシガルの件に關して、露西

亞と清國の間に葛藤起り、危機一髪に迫りたれば、十五年前其力を假つて長髮賊を討平せし以來、其伎倆と其人物の頼る可きをしみて、記憶したる清國政府が、ゴルドンの意見によつて和戦を決し、若し戦争と決せば直ちに推して軍師となさむと、偕は急電を以てゴルドンを招けるなり。一考してゴルドンは直ちに承諾の返電を發し、附信して曰く、條件などはゴルドン無頓着と。さて電報を以て英國陸軍省に六ヶ月の賜暇を請ひ、俸給不用、且つ我政府を戦争に引込む心配御無用の二句を添へぬ。陸軍省は危ふむで容易に許さず、清國行の目的と任務明らかあらざれば、願聴届け難しと返電す。其は目下不分明、何れ清國より委細上申す可し。然らば願の儀相成らず。電報往復三兩回、ゴルドン打腹立つて、面倒なりと工兵大佐の官を辭する旨打電し、返事も待たず六月十日清國行の汽船に乗りぬ。さきに官費を以て印度に來り、辭職の結果後任者の旅費を拂ひたれば、囊中殆ど空しく、(註、新任の費用は夥しかりき。高價なる大禮服など、一度も手を通さずして止みたり。好々、

支那に着いたるは、李鴻章への土)孟買より清國迄の船賃は知己より借りて産にせん』と、ゴルドンは云ひぬ。孟買より清國迄の船賃は知己より借りて拂ひつゝ、出發の前、ゴルドンは初めて新聞紙上を假りて清國行の目的を明らかにして曰く、余が此行の目的は、清國を勸めて露國と戦争せざらしむるにあり、是れ清國の爲、世界の爲、殊に英國の爲あり……武勳に甚だ重きを置かざるの余は、つまらぬ戦争に微々たる譽を得んよりは、平和を増進するを以て遙かに大なる名譽とする者あり』と。

七月ゴルドンは天津に着きて、絶へて久しき李鴻章に會ひぬ。ピストルを持ちて追かけ追かけられたる其は一場の夢、俠骨依然國難を聞ひて忽ちに駆けつけたるさきの常勝軍司令官を見るより、李は吾を忘れて其頸にすがり、ゴルドンを接吻せり。ゴルドンは此處に詳らかある現下の状態を聞きぬ。李は極力平和説を執るも、北京朝廷には主戦論非常に熾にして、危機目前に迫れり。ゴルドンも此場合、十分係累を絶ち置くの必要を感じたれば、再び本國の陸軍省へ向け、一八八〇年七月二十七日、

小官は李鴻章に面會せり、李は小官の留まらんことを請ふ。小官は目下の危機に際して、清國を見棄つる能はず、適宜の行動を爲すの自由を得んことを欲す。故に小官は辭職の聞届を請ふと打電し、直ちに北京に到る。北京朝廷は歡呼して舊恩人を迎へ、醇親王以下總理衙門に相會してゴルドンの意見を質しぬ。ゴルドンは現下の國勢到底露國と開戦するの不利なるを陳し、一旦開戦とならば宣戰數週にして北京は露軍の占領する所となる可きを説きて、極力平和を勸む。主戦黨容易に肯かず。ゴルドン卓をたいて曰く、今のさまにて露國と戦ふは馬鹿の骨頂なり』と。手に汗を握りたる通譯官馬鹿の一語に到り、ぐつと詰まりて得言はず。卓上に一冊の英華字典あり。ゴルドン突と立つて、字典を引わけ、愚の一字を指し示す。尊大なる衙門諸大臣駭然として顔見合はしぬ。然も皮下注射は奏効せり。滿朝の輿論は翻りて平和説に歸しぬ。ゴルドン即ち退きて、清國の爲に長文の國防策一篇を草し、萬一外國の襲撃を受けたる

● 場合の作戦經書は斯々、また軍隊編制は斯々、と詳らかに長久の計を示しぬ。其結句に曰く、清國は外國のエラキ將校を要せず、余はエラキ將校と云ふ、何となれば余は清國に於てはエラキ將校なればなり、余若し清國に留まらば、清國の爲に不利なり、米佛獨諸政府は之を妒みて、各々自國將校を遣はさんとする可し、且つ余は長く留まるの要なし、余が推薦したる所は清國自ら成し得る所なり、清國にして成す能はずんば余また何をか成し得んや」と斯くて献策空しからず、平和の落着いよく、確かなるを見たれば、ゴールドンは直ちに別を李鴻章等に告げて、八月十四日には已に上海まで歸れり。たましく英國陸軍省より電報あり、辭職は聞届け難し、賜暇は取消す、とあり、ゴールドン怵へず、返電して曰く信用してもよさうなものならずや、小官が清國を發したるは彼電報の着する前にあり……其れにても猶賜暇を取消さるゝや、折返して、明年二月迄賜暇免許の電報は來りぬ、然も其年の十月初にはゴールドン已に英國

にありき。

支那より歸れる翌月、須臾も安息する能はざるゴールドンは當時紛擾を極め居れる愛蘭問題を研究せむと、愛蘭に赴きぬ。地主の味方にあらず、小作人の黨與にもあらず、唯閑なる遊獵者が小鳥を狩りに來し体にて、一挺の獵銃を提げつゝ、紛擾の尤も烈しと聞へたる地方の村々落々遍ねく行きめぐりて、視察一ヶ月、愛蘭小作人の情態は歐洲は借置き世界の何處にも類無き悲惨のものなるを認め、其救濟策とては、姑息手段を措き、英政府にて紛擾の中心なる地方の土地を買ひ上げ、土地委員をして新に之を處理せしむる外に道なし、と知己に書を寄せて細かに自家の經綸を述べぬ。果然斯工兵大佐は唯の「工兵大佐」にはあらざりき。軍人の家に生れ、軍人として身を出し、職に當つては専門の伎倆を揮ひ、兵を指揮しては名將の譽を得たるも、志は濟世にあり、才は經綸にありき。されば陸軍省の命を守つて、窮屈なる規律の下に工兵大佐の専門的職務

に従はんより、寧ろ蘇丹の熱砂を驅け廻りて乱民を治めしなり。本國の陸軍省も此「火の兒」をばやゝ持てあつかひし氣味ありて、其氣の向くがまに、其廣き帝國與國の彼方此方に貸し與へ、本國に於ては即ち閑却する所あるを免れざりき。

一八八一年四月、無事に苦しめるゴルドンは喜望岬殖民地政府に打電して、昨年一旦辞したるバストランド經營の任に當りても差支なしと云ひやりぬ。然も喜望岬よりは何の返事も來らず。偶々工兵將校仲間、モーリシヨス嶋(印度洋中に浮べる一孤嶋)要岩司令官を命せられ赴任を欲せずして、代人を搜し居たる者あり、閑殺せられむよりは嶋守の役目が猶ましなるべし、斯る場合に普通の本人より謝禮だにせずとならば、ゴルドンは進むで之を引受けぬ。斯くて五月に英國を立ち、路蘇士を経てゲツシーの墓(註、ゲツシーは蘇丹に於て前後六年ゴルドンに使はれ、スレーを討滅したる勇將なり。ゴルドン蘇丹を去る時、共に去らむと勸めしも、ゲツシーは留まりて疾を得、)を吊ひ、モーリシヨスに到りて、任に

就きぬ。ゴルドン此嶋(註、懶惰のバトモスとゴルドンは呼べり。バトモスは使徒ヨハ子の流されし島なり)にとゞまるこ

と殆ど一年、兵舎の修繕を監督し、水はきの運びを世話する外に要なき無味の生涯。ゴルドンは種々印度洋の防備に關する方畧を立て、また閑には舊約聖書に所謂エデン園の位置に關する研究なぞして、悶を遣れり。此嶋にありける間に、陸軍少將に進みぬ。

一八八二年四月、南阿喜望岬殖民地より書面達しぬ。バストランドの紛擾未だに已まず、去年、前殖民地内閣まで申込まれし如く來りて一臂の力を假し玉ふまじくや、本國政府へは已に照會して許可を得たり、どの文意ありき。籠を脱け出づる飛鳥の心にて、ゴルドンは書に接したる翌々日帆走船に打乗り、印度洋の大濤に揉まれつゝ、五月喜望岬に着きぬ。バストランドには別に知事オルベン氏あり、其をのけ難しとて、殖民地政府はゴルドンに當分殖民地軍隊司令官になり呉れよと請ひぬ。大抵の人ありせば、斯含糊姑息の舉動に對して、直ぐにも辞任す可き所なれ

と、ゴールドンは兎も角もして同地の紛擾を鎮めん心ありたれば、枉げて其求に應じつ仔細にバストランド問題を研究して意見書を提出せり。バストランドはオレンジ自由國の東南にある伯耳義大の豊饒地、土民頗る聰明、曾て十分の自由權利を保有するの條件にて英國臣民となり、英人の官吏に治められ、小屋税を納めぬ。其内南阿に金剛石發見せられ、バスト人は出稼に赴き、勞働の賃銀として喜望岬政府の認可を以て銃砲彈藥を受けぬ。十數年を経て、喜望岬政府は兵器押收條例を發して、バスト人に兵器を渡せど迫りぬ。バスト人憤りて肯かず。斯くて終に戦となりしが、バスト人の腰中々に強くして、征伐埒明かず、睨合の姿にてゴールドン赴任の當時に到りぬ。如何なる場合にも、正直は最善の政略の金戒を把持し、義理を第一に指さすゴールドンは、バストランド問題の真相を見て、殖民地政府先づ其過失を承認し然る後正當の處置をなす可き事、治民官は其人を精撰して清白の人物を遣はす可き事を建言しつ。僭土

人との交渉開かれて、バストランド土酋の四人中三人までは交渉に應じたれ共、殘の一人マスファと云へるが治民官の下に立ち小屋税を納むるを拒みぬ。ゴールドンは此土酋に親しく面會して、説かば承服せむこと必然なりと思ひたれば、談判中は決して兵を進めずと云ふ事を知事オルペンと堅く約束し置きて、單身土酋の砦に乗り込み、談判を始めぬ。斯くて議漸く熟せむとする折から、忽ち急報あり、他の土酋の軍喜望岬政府の命を受けて來り攻めんとするを告ぐ。マスファ大に怒りて、直ちに和談を中止し、賣られて纔かに生命を全ふせるゴールドンは不信不義の舉動を憤り、喜望岬に歸るより早く辞表を突き出し、十一月初旬英國に歸りぬ。喜望岬政府の總理は、ゴールドンの辞表に答て曰く、已に貴下がバスト人と戦争するを欲せずとの通知に接し、又貴下がマスファと會見の趣意を思ふに、遺憾ながら貴下が現任に留まらるゝは國家の利益に害ありと認めざるを得ずと。國家の利益！國家の利益！兵力に藉つ

て無理を通し、未開弱邦の民を虐ぐるは、國家の利益なり。義を重んじ、弱きを憐れむは、國家の利益を害するなり。ゴルドンは終に金箔つきの愛國者たる能はざりき、あまりに俠氣に満ちたるが爲めに、あまりに潔白なりしが爲めに。

喜望岬の愛國者が捨てたる俠骨を伯耳義王は直ちに拾ひ上げぬ。是れより先き伯耳義王は阿布利加コンゴ(阿布利加は影の如くゴルドンの身に添ひぬ)地方に探征隊を送らむとして、ゴルドンに指揮を委任するの意あり、ゴルドンも王に謁して其打合せをばなしたることありしが、其喜望岬より歸るや、王は直ちに書を賜ふて曰く、卿も今は自由の躰となりたれば、寡人は再び卿に向ひて寡人の爲めに力を致されんことを請ふ、目下の所は卿を煩はす可き使命なきも、寡人は卿を收め置き、唯今よりして卿を寡人が顧問官とせんことを切望す、條件は卿の請ふに任す、寡人が卿の大なる才資を推重するは、卿の知る所なりと。ゴルドン

もまた事に臨むで王の爲めに力を致さんことを約しぬ。

斯くて百忙の生涯もこゝ暫しの閑を得たれば、ゴルドンは年來の宿望なりし聖地の遊を果さむと、其年十二月の末英國を立ちて、地中海東パレスタインの地に赴き、エルサレムの郭外に六ヶ月、ジャツファに六ヶ月、合せて一年の月日を基督生死の地に送りぬ。彼は工學者の眼を以て、基督の墳墓、十字架の古跡、エルサレムの古城壁門、聖殿の位置、さては昔ノアの方舟がどまりしはアルメニアのアララツト山にあらすと云ふ事まで精確なる觀察をなし、圖をひき考證をなすと共に(註、斯滯在中にゴルドンはシヨルダ川より紅海に通ずる運河開鑿の設計を案じぬ。斯運河成りて、専ら蘇日々に運河の利用をやめなば、終には埃及を全く自治たらしむるを得ん、と謂へり)日々聖書を抱いて古道壞壁の間を彷徨しつゝ、火の如き愛慕を以て、救世主の生涯を喚び起しぬ。一部の「パレスタイン感想録」はゴルドンが斯一年の生涯の如何に過ぎたるかを示す。

ゴルドン曾て云へることあり、余は吾宗教を好む、宗教は余が大外套な

りどげに彼は斯外套を着て五十年の風雨を突貫せるなり。其昔士官學校を出でしこのかた、長髮賊の彈雨の中にも之を着、赤道州の深林中にも之を着、蘇丹の砂漠の星の夜にも之を着、最期のカアツームにも之を着たり。實に基督は彼が理想の標的、聖書は彼が不斷の食糧、信仰は彼が鑑なりき。然もこゝに一の注意す可き事あり。彼は斯くの如く熱信の基督教信徒にして、英國國教會に屬し居たるも、彼は渾ての宗教に對して尊敬を拂へり。其エルサレムにあるや、しばく希臘教の會堂に行きて、聖餐の式に與れり。翌年カアツームに赴くや、途に天主教僧正に會ひて、「願はくは足下の祈禱に余を忘るゝなかれ」と云ひぬ。彼は回々教徒の砂上に跪きてメツカの方を拜せるを見ても肅然容をあらためぬ。赤道州の蠻人が可笑しき祈禱を見てすら「土人が眞神を知らざりしは事實なり、然も上帝は彼を知り、彼を促して祈らせ、而して其祈に答へ玉ひぬ」と自から省みて己を責めぬ。彼は毎に國民よりも人間を見たる如く、宗教

に於ても宗派よりも信仰を見たり。宗教は、ゴルドンにどりては、教義に
あらずして信仰也、理論にあらずして實行也、禮拜の式にあらずして生
命也、ゴルドンは不幸にして終に彼偏僻なるものを有せざりき。

斯くて一八八三年の一年は、いとも靜かに救世主の古跡に過ぎぬ。此靜
かなる今より過去五十年の生涯を顧みて、家信に認めて曰く、

余は長生するも今後十五年を過ぎじ。回顧すれば吾生は唯一日の如
し。余は恰も他の諸人と共に日暮の流車に乗らんとする人の如し。余
は急ぎて豫定より二時間前に停車場に着きぬ。然るに他の急がぬ人
々も矢張同一列車の間に合ふなり。即ち、余はあまり性急に吾生涯を
送りぬ。

げにクリミア戦争の昔より蘇丹の末期に到るまで、三十年間歐洲亞細
亞阿布利加の三大陸を走せまはりて、其處の政府に借られ、此處の民を
治め、暫らくも安息の暇なかりし其生涯は、初めてこゝに一年の安息を

見出しぬやがては瀑布とたぎり落つべき水の流れも山一つ此方はさ
り氣なく淵をなして、湛然と淀めるも、不思議からずや。ゴルドン傳著者
バツトラル氏の曰く、斯長き静思の時間は、宛ながら彼が所謂信仰の外
套を着て幾年か苦戦しつゝる其至當の報酬として與へられたるもの、
如く、また彼が三十年來其教を研究實行し、努めて其模範を趁ひ、其名を
崇拜せる救世主の最期の場所にて、彼自身も今や間近に迫り來れる己
が大苦痛に對するの準備をなさしめられたるもの、如しとゴルドン
自ら姉に書き送りて曰く、斯地を去る可き時の近づくにつけて、余は愈
此地に愛着するを感じ、余が肉は斯地を離るゝを嫌ふと、勇壯なる靈よ、
まさに来らむとする十字架の幽然たる影何處ともなくさし來て爾も
こゝに寒戦を感じたる乎、行け、勇壯なる靈よ、大能の神爾と與にあり。
十二月中旬ゴルドンは別を聖地に告げて、一八八四年一月一日伯耳義
國都ブルツセル府に着きぬ、是より先き伯耳義王レオポルド一世は已

に阿布利加大探險家スタンレーを遣はして、コンゴ地方を探險せし
め、コンゴ自由國の基礎を据へしめたるが、今や更にゴルドンを派し
て同地方に於ける奴隸商を一掃し、其阿布利加人を馭するに馴れたる
手腕を假つて大に内地の經營をなさしめんと欲して即ちゴルドンを
招けるなり、たましく英政府に故障ある由耳にしたれば、ゴルドンは陸
軍省に宛て、陸軍少將の官を辞する旨書き送り、且つ退職に伴ふ損失
の分は伯耳義王懇ろに引受けらるゝとの事なれば、恩給などは不用お
る旨書き添へぬ、流石英國にても、ゴルドン程の者を無慘々々退職せし
むるを惜みて云々する者少なからざりければ、陸軍省も終に辞表を却
下し、且つ伯耳義王の爲にコンゴに赴くの許可を與へつ。今は障る事
もあらざれば、ゴルドンは一ト先づ英國に歸りて、サウザムプトンの姉
に別を告げ、

(註)ゴルドンは東奔西走に一生を過して、終に妻を娶り、家を成すの機

會あかりき。其親族はしばく、ゴールドンの結婚を勧めたるもの、如し、然もゴールドンは寧ろ獨身を望みぬ。曾て曰く、結婚せざる者は幸なるかな、余は想ふ結婚は人間を傷ふと。妻此を望めば夫望まず、夫彼を欲すれば妻欲せず、此は毎に見受くる所ありと。蓋事業家に係累は禁物あり、且ゴールドンは心臟の持病あり、死と云ふ事常に念頭を離れざりしかば、其生の一刻をも愛みて之を事業の上に注ぎぬ。其獨身の生涯を擇めるは、冷血あるが故にわらず、まさに冷血なる能はざるが故なり。

然も人は愛する所無ふして生くる能はず。ゴールドンの愛は其姉なるアウグスタに向ひて注ぎぬ。

一月五日姉への書翰に曰く、生は君が爲に鞘(註、寫眞の事、蓋靈を中身に見て体を鞘に比せしなり)三枚を誂へぬ。涙は悪魔(サタン)の元行(エレメント)なる海と同じく鹹あるは奇ならずやと。

ゴールドンは實に多血多涙の丈夫なりき。

準備を終り、一月十六日英國を立つて翌日ブルツセル府に着き、伯耳義王に謁してコンゴ遠征に關する最後の訓令を受くる時しも、一通の至急電報は、突然ゴールドンを英國に呼び還へしぬ。

第十一章

蘇丹引拂

ゴルドン少將が蘇丹總督の任を辞し、足の塵を拂つて埃及を去りしより、四年爰に過ぎぬ。斯四年間に埃及は困難より困難に赴き、衰微より衰微に移りつ。其の昔ゴルドンが憂の眼を以て見たりし外人就中英國の埃及干渉は、埃及人の反抗となり、國民黨の勃興となり、アラビীবシアの愛國的運動とあり、内外勢力衝突となり、歴山港の砲撃とあり、ウルズリー將軍の埃及征伐となり、アラビীবシアの錫蘭禁錮となり、(註、アラビイは本年禁錮を解かれ、歸國の許を得たり。然も埃及は終に英國の手を離るゝの時なかるべし)埃及に於ける英國勢力の確立となり、埃及の獨立はこゝに愈影の如く薄ふなりて、騒ぎは一時終を告げ

ぬ。埃及は斯くして一と先づ定まれり、然も本國の騒ぎにまぎれて放擲されし蘇丹の騒ぎは夥しきものになりぬ。蘇丹の騒ぎとは、マアヂの叛乱なり。

敵は偽聖と呼び、彼方はマアヂ即ち神人又救世將軍と呼ぶマホメット、ア、メットは、蘇丹の北部ナイル河の西岸なるドンゴラの大工の子、一八四八年に生れぬ。一八四八年は十六歳のゴルドンが初めて陸軍士官學校に入りたる年なり。長じて船乗ありける其叔父に使はれしが、一日叔父の爲に散々打擲されしを憤り、出奔してカアツームの回々教導師の許に到り、教育を受け、次でバアベルの自由學校に入りて讀み書き並に回々教の教義法則を授けられ、業成りてヌル、エル、ダイム(不斷の光と云ふ意)と號する其道の聖に就きつ。やがて道師に上りて、白ナイル河の中流に横はるアツバスと云ふ嶋に赴き、洞穴を鑿ちて之に住し、斷食し、燒香祈禱し、また默思沈想して、聖人の名漸く高ふなりぬ。斯はゴルドン

が赤道州に將た蘇丹に總督として恩威よく四方を鎮せる程の事なり。已にしてゴールドンは一八七九年の末に蘇丹を去り、ゴールドンの爲に二度まで追拂はれしラウフバシアが蘇丹總督となるに及び、ゴールドンの施設を片端より崩し去て、虐政到らざるなく、怨嗟の聲全州に滿つるに到れり。アツバス嶋の隱者は此機を覗いて、次第に野心を長じ、財を積み、弟子を集め、附近の有力なる酋長と婚を結び、以て其勢力の根據を作りつ。回々教國には一の傳説あり、ヘギラ即ち教祖モハメツドのメツカ出奔より一千二百年を経て、第二のモハメツドとも云ふ可きマアヂ出現し、大に教勢を振起し、萬國を征伐す可しと云ひ傳へたり。曆を按ずれば、一八八二年十一月十二日は即ち其期に當れり。於是アツバス嶋の隱者は次第に鋒鏘を露はして、一八八一年の初より吾はマアヂあり回々教を改革し萬國を征伏す可き神託を受けたりと公然として唱へ出しぬ。時に年三十四、其風采は瘠ぎすにして、丈高く、髯黒く、面色茶褐色にして、

目光炯々たり、読み書き甚だ拙なきも、人を馭し事を斷ずるの器量拔群にして、十分に一國民を帥ふ可き力量を具へぬ。彼れは實に蘇丹の洪秀全、洪は南清のマアヂ、其人物出處舉兵の次第まで頗る相肖て、而してゴルドン一生に二度まで同様摸型の敵手に抵るは、遇も亦奇なるか。マアヂの出現は、宛ながら火を白茅の野に放ちぬ。土耳其種族(埃及政府)の虐政に苦しみ、鬱憤の胸を摩つて居たりし蘇丹の亞刺比亞種族は、救世主の出現を見るより、先を争ふて其旗下に走せ集まりぬ。其初は蜂集の一つ覆りし程も思はざりし蘇丹總督ラウフバシアも、漸く驚きて、二度まで征伐隊を遣はし、が手もなく破られつ。一八八二年ラウフに嗣いで蘇丹總督とありしアブヅール、カデール、大軍を派して一舉に掃蕩せんと圖りしに、此れまた殆ど屢になりぬ。概して埃及兵の怯懦なる、某歐人が「余は三たび埃及人の戦争に臨むを見たり、而して終に一人の勇士を發見する能はざりき」と云へる程なるに引かへ、左らぬだに勇敢者

る亞刺比亞種族が迷信の火に煽られて、大砲小銃林の如く並むだる敵の隊伍を目がけ、旗をふり劍戟を閃めかし咄喊して來り襲ふ勢は、殆ど枯葉を捲く疾風の勢あり。蘇丹の政府は狼狽して素より此叛亂の焰を鎮壓す可くもあらず。本家の埃及政府は對英衝突の大騒ぎに後を顧る可き暇無し。而して表の騒ぎ纔かに静まりて漸く顧みれば、裏手の蘇丹は已に一面の大火となりぬ。

埃及政府も、後見人たる英國政府も、大に驚き、英の將校ヒツクス大佐を將として大に征討軍を起しぬ。斯くて一八八三年の初夏より秋にかけて、ヒツクス大佐は蘇丹の諸處に轉戦し、時々小利を得たりしが、孤軍深く敵地に入り、援兵水糧共につゝかず、十一月五日カズギルに於てマアチの大軍に圍まれ、ヒツクス以下十名の英國士官、一萬一千の埃及兵、馬五百匹、駱駝五千頭、一騎も剩さず塵にされて屍を黃砂に横へつ。其翌日東蘇丹のトールカル戍營救援に赴ける別軍も、マアチの裨將オスマン、チ

グナの爲に大敗北をとりて、英國領事マックリーフ之に死しぬ。十一月二十日、ヒツクスの大軍全没の報英國に達して朝野駭然たり。時の首相グラッドストーン氏は急に内閣會議を開いて、英兵を遣はし英貨を費やして蘇丹を克復するか、將た埃及政府をして蘇丹を放棄せしむるか、討議の末後策を執るに決し、外務大臣グランビル伯をして蘇丹引拂を埃及政府に促さしめぬ。埃及内閣依違して應せず。英政府即ち逼つて其内閣を辭職せしめ、新内閣をして否應なしに蘇丹引拂の方針を執らしめつ。斯くて英政府も埃及政府も共に蘇丹を放棄することに一決しぬ。然もこゝに一の大困難あり。東アビシニアの境より西フアセルに到り、南赤道州より北ヌビア砂漠に到るまで、夥しく蘇丹全州に散在せる鎮營の多數は敵中に孤立し、兵士商人其妻子等通算すれば、埃及人の蘇丹に在る者三萬人に下らず。カアツームにはまた歐人の居住するあり。如何にして斯等を無事に引揚ぐ可き乎。今六ヶ月早かりせば、せめてヒ

ウックス大敗の前なりせば、猶せめてヒックス大敗の後直ちに緊急の處置をなしたらむには、蘇丹の引拂も猶困難の幾分を減す可かりし。英政府の思案に費は、埃及政府との交渉に潰れし時日は、今や十倍の困難を加へぬしか困難を加へたりと雖ども、已に埃及政府に逼つて蘇丹引拂を諾せしめたる英政府は、何處までも責任を負ふて爲す所なかる可からず。要は當局其人を得るにあり。牽制保護の用をなす可きヒックスの軍已に全没し、蘇丹の大半已にマアヂの有に歸したる今日、誰か赤手を揮ふて彼三萬の生靈を全ふし、蘇丹撤去を成就する者ぞ。

一八八四年一月十九日、英國民は昨夜ゴールドン將軍が蘇丹善後の大任を帯びて英國を出發したりと云ふ報に接して、且は愕き且は歡呼の聲を放ちぬ。

ヒックスの征討軍全没の慘報に接して以來、蘇丹の處置を托せむ者、ゴールドンの外にある可からずとは、聰明ある人士の齊しく唱道する所なりき。有名なる博愛家某は内外非奴隸協會の書記に書を寄せて曰く、願くば天使グラン井ル伯の側に立ちて、斯くて云はんことを、『今汝人をヨツバに遣はして、ゴールドンと云ふ人を呼べ。彼汝に爲す可き事を告げむ』と。其時ゴールドンはパレストアインのジャツファ(即ち古のヨツバ)に寓し居たりしなり。ゴールドンもまた曾て一たび足の塵を拂つて去りしとは云へ、埃及および蘇丹の形勢は絶へず其眼中にあり、其預言の着々適中して、埃及政府が見す、獨立の實權を失ふを觀ては、歎息の眉を顰め、六年も其上に立て治めたりし蘇丹の紛擾を見ては、腕を摩つて唇を噛むを免れざりき。一八八三年十一月パレストアインより其姉に寄せし其手翰の一節に曰く、蘇丹の事には小生も頗る注意致し居候、併し彼地へ參るはいやに感じ候也、此は甚だ吾ながらよくしたりと存じ候、何となれば小生初め當地へ參りし頃は蘇丹へ往つて見たしと云ふ卑劣なる欲望をもち居たりし故に候と。ゴールドンは克己して云はず。英政府は因

循して断せず、(註英政府は躊躇して曰く、政府は當初よりゴールドン將軍に力を假し時は移りぬ。ゴールドンは全く念を蘇丹に絶ち、伯耳義王の爲に愈々コンゴ地方に赴く事に決し、一月初旬告別かたぐ、英國に歸りぬ。たまぐ、ポール、モール、ガゼット新聞記者ゴールドンと對話して其蘇丹に關する意見を發表し、附言して曰く、

何ぞ支那戈登に全權を與へてカアツームに遣し、彼土の絶對的制裁權を帯びしめ、マアヂと談判せしめ、各所の守備兵を救助せしめ、爲し得る所を成して以て蘇丹の破殘よりして收拾し得可き限りを收拾せしめざるや、斯事業に對してゴールドンが拔群の資格を有するは今更辨するの要なし。斯は顯著の事實、争ふ可からず、また争ふ者なきなり……生れ得て統馭の天才を有し、『常勝軍』を組織するの比類なき伎倆を有し、蘇丹及其人民に關して十二分の知識を有する斯くの如き人物を彼土に在らしむるの緊要なるは、何人も拒む能はざる所。何ぞ

爲し得る限りを成すの全權を授けて、ゴールドンを蘇丹に遣はさる。成程ゴールドンと雖ども隻手にして彼怒號せる渾沌界中に秩序を回復し得ざることもあるべし。然も之を試むるは決して無用にあらず。而して事若し行ふ可くんば、速やかに断行せざる可からず。

斯一篇の社説は夥しき注意を喚起し、ゴールドンを遣れ、ゴールドンを遣れ、と云ふ輿論の叫は非常に盛んなるものとありぬ。然も政府猶断せず。ゴールドンはいよいよコンゴ行の準備を整へて伯耳義に去り、一月十七日ブルツセル府に着したる由知れたりければ、或は或は望を萬一にかけ居たる者も今は全く断念し、口々に政府の無能を罵り居たる折柄、十九日の新聞は其前夜ゴールドンが蘇丹に向けて出發したる報道を傳へて、世を驚かしぬ。

前章參看、一月十七日ゴールドンは已に伯耳義に着して、レオポルド王よりコンゴ行に關する最後の訓令を受け居たる時しも、其日の正午に

英國より一通の至急電報かゝりぬ。發信者はクリミア戦争に支那戦争にゴールドンと肩を並べて従軍し、今は陸軍の大立者となれる同年の友、ウルズリー將軍、直ぐ倫敦に歸れとの信文あり。ゴールドンは直ちに其意を猜し、即刻伯耳義を立つて翌十八日の早朝倫敦に着し、ウルズリー將軍と長時間の會見を爲し、午後内閣諸大臣を見て使命を領しぬ。ゴールドンをして其顛末を語らしめよ。

正午彼れウルズリー來り、余を伴ふて内閣諸大臣の許に到る。彼れ先づ入りて諸大臣と談話少時、歸りて曰く、女皇陛下の政府は君に左の件を委任せむとす、即ち政府は蘇丹を引拂ひ、今後同地の政治は一切保管せざる事に決しぬ。君行いて之を爲さんや。余曰く、然り。彼曰く、入れ。余即ち入りて、諸大臣を見る。諸大臣曰く、貴下はウルズリーより我々の訓令を聞かれしや。余曰く、然り。余重ねて曰く、諸君は今後蘇丹の政治を保管せざる事に決し、今蘇丹引拂に赴かむことを余に望み玉

ふなるべし。諸大臣曰く、然り。會見はこゝに終り、余は午後八時カレールへ向けて立ちぬ。

(註一)首相グラッドストーン氏は二月十二日衆議院に於て、詳かにゴールドンの使命を説きぬ。其氏の曰く、ゴールドン少將の使命は、蘇丹克復の爲にあらず、蘇丹の諸會長を説いて埃及政府に服従せしむる爲にもあらず、一には埃及より出せる守備兵を撤して蘇丹を引拂ふ爲め、二には埃及の占領中引あげ若くは改易せる祖先傳來の權力を各史丹に還附して蘇丹の再建立をなさんが爲めなりと。

(註二)蘇丹引拂に關するゴールドンの意見は如何。曰く、余は狗尾截斷の爲に行く、訓令を受けなければ、結果の如何を問はず、余は之を斷行す可しと。

途中地中海の舟中にて認め本國外務省に送りし意見書の一節に曰く、將來の善政の保証なくして、蘇丹の叛民を克服し、之を埃及人

の手に渡すは、不義と云はざるを得ず。然るに、斯善政なるものは無数の人と金とを費すにわらずば、確かなるを得難きは明白なり。蘇丹は無用の領地なり、從來已に然りき、今後また然らん。其面積は日耳曼、佛蘭西、西班牙を合したるよりも大にして、大抵荒蕪の地、善かれ悪かれ獨裁官にわらずば治め難し、而して其獨裁官が悪ければ、叛乱は斷ふる時なからむ……我政府が蘇丹引拂を勸告せるは至當也と思惟す。

(註三)然らば其方法は如何。右意見書の一節に曰く、小官の意見は、メヘメット、アリー(埃及中興の英主)の蘇丹征服時代に存在したりし諸小史丹の一門は今猶存在することなれば、蘇丹は斯輩に還附す可きものなり、而して蘇丹還附につきては、マアヂは一切計算外に置き、マアヂの主權に服従すると否とは右諸史丹を隨意にしたし。……諸史丹はマアヂを主君と仰ぐも恐らく得る所なかる可きを

以て、多分獨立の態度を維持す可し。……然らばマアヂは之を威伏せむと試むるなる可く、また埃及政府の守備兵雇官等の撤退に反對せんか。……小官は力の限り我政府の要求通り蘇丹撤去を實行す可く、可成の一切の戦闘を避く可しと雖ども、若し我政府の期望通り悉く遂行し難き場合に際せば、我政府は小官に加勢と斟酌を與へられんことを望む云々。

(註四)蓋し不義を惡み弱きを憐むゴールドンの同情は、寧ろ所稱叛徒に傾きたりき。

蘇丹の社會を横截すれば(一)埃及官吏(二)亞刺比亞種族(三)純蘇丹土人の三層に分つ可し。マアヂの運動は、政治的意味より云へば、亞刺比亞種族の重なる一部が主となり、土人の幾分之二に從ひ、埃及政府のくびきを投げ棄てたるなり。

下を憐むの心深きゴールドンは蘇丹に於ても深く土人の心を得ぬ。

曾て蘇丹總督を辞する時、報告書中に述べて曰く、余はナポレオンにわらず、ゴールドベールにもわらず、大支配者にもわらざれば、大財政家にもわらず、然も余は斯く云ふを得、即ち余は奴隷賣買の巢窟に踏み込みて之を勦絶し、また人民をして余を愛せしめたりと。

亞刺比亞種族の中にはゴールドンがゼベール初め奴隷商等(皆亞刺比亞種族)に手ひどく當りし爲め、畏れ且衝める者もありき。

埃及官吏に到ては、最もゴールドンの身近にありて、尤もゴールドンに嫌はれたる者なり、清廉と勤勉を兩脚として立てるゴールドンは、尤も因循と腐敗を惡みぬ、而して因循と腐敗の代表者とも云ふ可きは、東に支那官吏あり、西に土耳其埃及の官吏あり、ゴールドンは心底より彼等を嫌ひ、寧ろ奴隷商よりも彼等に手ひどく當りぬ。一八八三年十月バレストアインより其姉に寄せし書翰に曰く、蘇丹の民は生を好き居りし次第にて、人間的に云へば生が蘇丹を管領したれ

ばこそ斯回の叛亂を惹起したりとも申す可き歟、仔細は生と蘇丹の民と心を二にして彼土耳其、バシア連を惡みしが故なりと。一八八四年九月十二日の籠城日記に曰く、余が敵を「叛徒」と呼ばずして「亞刺比亞勢」と呼ぶを注目せよ。蓋し余が現に蘇丹を其各頭領の手に戻す可き勅令を握りながらいまだに踏こたへ居る所を以て見れば、叛賊は寧ろ我にわらざる歟否歟、心苦しき問題なりと。其踏み留まりしは、ひとり三萬の埃及人の生命を救はんが爲のみ。

(註五)斯る次第にて、ゴールドンは蘇丹の民に同情あり、蘇丹の民はまたゴールドンの舊恩を懷ふをもつて、今其民の嫌へる埃及人の支配を蘇丹より撤去するは甚だ難事にわらずと思惟したるならん。出發に臨むで、ゴールドン其姉に書き送りて曰く、小生は今夜一の仕事を遂げん爲め蘇丹へ參り、其上にてコンゴへ參る筈に候、小生は少しも動せず、幸に心を擾はすなかれと。是れ獨り姉の心を慰め

んが爲めに強いて斯く云ひしにあらざるべし。

(註六) ゴルドンの囊中は常に空しかりき。ウルズリー將軍の電報を受取るや、ゴルドンは數磅を伯耳義王より借り、其を旅費にして倫敦に來れり。諸大臣との會見終りて出づる時、ウルズリー不圖心づき、時に君は金を持つて居るやと問ふて、實狀を知りたるが、銀行の執務時間は已に過ぎたり、夜の八時にはゴルドンも出發すれば、ウルズリーは其處に十磅、此處に二十磅やうく二百磅ばかり借り集めて袋に入れ、發車間際にゴルドンに渡しぬ。八日の後ゴルドンはカイロへの途中にて、昔蘇丹に於て書記として使ひし男の老いて盲し貧を極め居るに會ひて、其中より一百磅を與へぬ。金錢に淡泊はゴルドンの病ありき。

斯くゴルドンは一月十八日の朝伯耳義より歸り、晝内閣員と會見し、其夕八時蘇丹へ向けて立ちぬ。急遽の事なれば、荷物はすべて後送りとな

し。同伴は騎兵中佐スチユアルト一人。中佐は前年カアツームに在任せることあり、ゴルドンは曾て倫敦の某俱樂部にて相識り、見込をつけ置きたれば、今特に擇みて同伴せるなり。ポール、モール、ガゼット新聞は記して曰く、停車場に於ける光景は甚だ奇なりき。ウルズリー卿はゴルドン少將の鞆を提げ、外務大臣グラン、ギル伯は爲めに切符を買ひ、而してカムブリッヂ公爵は爲めに客車の戸を開き居りぬ。タイムス新聞は記して曰く、ゴルドン將軍が蘇丹鎮撫を引受けしどの報道に接して、一般に發揚せる安心満足の感は中々形容誇張し難きものあり。ヒツクススの軍全没の報英國に達してより、ゴルドンの出發まで二ヶ月過ぎぬ。

一八八四年一月十八日の夕ゴルドンは「騒ぐ勿れ」の一句を英國民への置土産に、射る箭の如く倫敦を立ちて、同廿五日の夜カイロ府に着き、チウフイック王に謁して懇命を受け、埃及在留英國全權委員サア、エゼリ

ン、バアリング内閣總理ヌーバルバシア等と會して諸般の打合せを濟し、英國派遣蘇丹全權委員兼埃及派遣蘇丹總督として同廿七日カイロ府を立ちぬ。道はナイル筋をとることに定めて、カイロよりアツスアンまで汽車、アツスアンよりコロスコまでは汽船にてナイルを溯り、其れよりスチュアルト中佐及びゴルドンの勸によりて此たび埃及王より舊領還附の命を與へしダアフォル史丹の子、並びに數名の従者と、駱駝に乗りてヌビアの砂漠を度りぬ。コロスコよりアブ、ハメツドまで、彎れるナイルを弓に譬へて絃とも云ふ可き此路は、亞刺比亞種族が「水無し」の海と呼ぶヌビア砂漠を貫きて、行程二百五十哩に及ぶ。ゴルドンの一行が護衛兵も連れず、カアツーム兵士の俸給として四萬磅の金をさへ齎らし、斯沙漠に乗り入りしと云ふ報を聞いて、英國人士は胆を冷やしたりしが、一行幸に恙なく、ゴルドンは駝背に前途の處置を案じつゝ、二月十一日バアベルに着きぬ。バアベルは紅海々岸スアキムよりカアツ

ームへ通ふ路と、カイロよりナイルに沿ふてカアツームに達する路と相會する所、實にカアツームの咽喉に當れり。行手の空には黒雲棚引けども、頭上には猶青天あり。バアベルの民は仁政の總督を忘れず、歡呼してゴルドンを迎へぬ。即ち大に重立たる輩を會して、ゴルドンは其使命を宣べ、然る可き知府を立て、助くるに長老會議を以てして、自治の基礎を確立せしめ、又先づ使をカアツームに派して、暴虐なる副總督を更め、且(一)マアヂをコルドファン史丹に任ずる事(二)租稅半減(三)奴隸貿易認可(著者云、ゴルドンの遺恨を想ひ見よ)の三條を布告せしめつ。やがてバアベルを立つて、二月十八日燦爛たる總督の金衣を着け、歡呼聲中に、やがては墓となる可きカアツームの都に入りぬ。

ゴルドン已にカアツームに入るや、宣言して曰く、余は兵隊を連れず、上帝の佑助により、蘇丹の不幸を濟はむ爲に來れり」と。總督府大廣間の正椅の上に大文字にて「神は萬人の心を治め玉ふ」と云ふ亞刺比亞文の一

句を掲げ、貧富貴賤老幼男女の別なく、普ねく、其所を得ざる者を招きて
 訟を聴きぬ。五年前ゴルドンがカアツームを去りしより、二度まで更迭
 せる總督は、二人ながら聚斂と鞭とを以て民を虐げたれば、夥しき租税
 滞納者を生じ、民皆惴々として督責を恐るゝの色あり。ゴルドン即ち總
 督府の庭前に於て、盡く滞納一件に關する政府の帳簿書類を焼き棄て
 つ。揚言して曰く、我々は最早鞭の要なし、何人と雖ども鞭足の刑に處せ
 らるゝ者ある可からず、いざある限りの鞭と刑具を持て來よ、これをも
 一同に燃す可きなり」と。夥しき鞭と刑具は山の如く積まれて、やがて欣
 び騒ぐ民の眼の前に灰となりぬ。苛税峻刑の廢止已に終りたればゴル
 ドンは直ちに總督府を出で、病院を見舞ひ、造兵廠を検し、牢獄を巡見
 して罪狀明白なる少數を除くの外盡く囚人を放免し、就中前總督の爲
 に鞭うたれて皮膚破れ筋露はれ起つ能はざる老人を見るより、怒に堪
 へず、カイロに打電して前總督の俸給五十磅を差押へ賠償として右の

老人に渡す可し、前總督若し肯かすんばカアツームに來つて審問を受
 く可しと懸け合ひつ。ゴルドンカアツームに入りて未だ一日ならざる
 に、驩聲城中に湧きて、狂喜せる衆民は吾史丹よ、父よ、教主よ、と叫びつゝ、
ゴルドンを取り圍みて、其手足に接吻しぬ。

カアツームの人心は斯く定まりぬ、蘇丹善後の處分は如何す可き。ゴル
 ドンの使命は(一)埃及派遣の守備兵を穩やかに蘇丹より引揚げ、(二)兎に
 角一の政府を穩やかに建て置き、(三)斯くして蘇丹を埃及より截斷し、(四)
 戦争を用ひず、(五)而して英國兵を呼ぶ事のみは許さるも其餘は盡く
ゴルドンに全權を委任するの約なりき。バアベルに到れる頃までは、ゴ
 ルドンも甚だマアヂの恐る可きを覺へず、一たびカアツームに到らば、
 蘇丹の人心を鎮撫し、マアヂを慰撫し、諸會長諸史丹を舊に復し、平和的
 に後の始末をつけて蘇丹を引拂ふは容易なりとし、蘇丹の事處るゝに
 足らずとカイロに打電したり。然もゴルドンは一時マアヂの勢力を見

損じぬ。當時マアヂの勢力範圍はコルドフアンを本據とし、碧ナイル白ナイルの流域かけて、東の方紅海近きトオカルの邊に及び、幸に埃及に通ずるナイルの一角は開けたるも、各内地の守備兵は固よりカアツームすら已に三方遠卷の中にあり。カアツームには八千の雜兵あるも、此は六萬の市民を保護するなれば、一兵を分つて遠隔の地にある他の守備兵の救援に遣はす能はず。蘇丹のあとを承く可き政府を立てむにも、各史丹會長に舊領安堵の辞令を與へてマアヂと對峙せしむるなどは、座上の空論、此回の叛乱は一部の蜂起にあらで、蘇丹全州の革命運動、マアヂが煽れる宗教的烈火の煽は、各種各族の隔障を鎔かし去りて、猶觀望し居れる諸族が意を決して起つも今は唯時日の論のみ、此大危急の場合に處するは、非常の大英斷ならざる可からず。凡そ斯くの如き難局に踏み込みて際どき勝を制せむとするに臨みて、成功の第一條件は全然信任さるゝにあり、寸毫も掣肘されざるにあり。

已に大体の方針を示したる以上、本國政府は飽くまで使臣の行動を信任し、苟も其主眼の處を誤らざる限りは、事毎に領きて可なり。然らずんば始より遣はさるゝに若かず。況んや近きも一千餘哩、遠きは即ち三千哩を隔てし、交通不便の蠻地に踏み込めるをや。また況んやゴールドンの如く直覺的天才の、當意即妙、獨創奇關の手段を以て唯一成效の手段となす者をや。信任放任は實に成功の第一條件なり。一月十八日ゴールドンの倫敦を立つや、蘇丹に關する全權を帯びて立ちぬ。然も其全權は手足を縛らるゝの全權なりしを、奈何英國には外事にかけて兎角英斷に乏しきグラットストーン政府あり。カイロには兎角ゴールドンに對して快よき感を懷かぬ全權委員バアリングあり、身を先にして家國の憂を後にする内外の俗流あり。倫敦よりカイロより繰り出したる電線は蜘蛛糸の如く使臣の手足を纏繞して、任意の運動を爲す能はざらしめぬ。ゴールドンがカアツームに入りたる二月十八日より四月八日まで、電信によ

り、飛使により、カアツームとカイロの間には意見の交換織るが如く行はれぬ。ゴールドンは斯大危急の場合に處する大英斷として、(一)速に奴隸大王ゼベールを送れ、彼に蘇丹總督を譲らんと打電しぬ。ゼベールは先年ゴールドンに討滅されしスレーマンが父、黒バシアと稱せられて、其昔蘇丹に帝王の如き威勢を振ひ、今幽されてカイロにあり、目下の場合斯剛の者ならでは、マアヂの向ふを張つて蘇丹を鎮する者なきをゴールドンは認めたるなり。(註、六年前ゴールドンは已に斯く云ひぬ、曰く奴隸征伐を差措か) ゴルドンは繰りかへしゼベールを催促せり、信せよ、余が言違はず、一刻も猶豫する勿れ、然も英政府は折角全權を以て遣はしたる非凡の子を信任するを知らざりき。カアツームの電報は頻りに「早く」「早く」と促しぬ。カイロは一連に「否」「否」を繰りかへせり。(註、蓋ゼベールに聞へし奴隸大王たぐ之に蘇丹を興ふるは不可なりと本國政府は思ひしなり。烏ぞ知らむ、毒よく毒を制す、マアヂの勢力を殺がむ者ゼベールの外に其人を求め難きを唯ゴールドンよくゴールドンの深意を)ゼベールは終に來らざりき。(二)戦争によらで各地の守備兵

を救ひ出さむには、此外に道なしと見て、ゴールドンは直ちにコルドフア^ンに赴き、マアヂと會見して、一切の眞情を打明け、身を以て三万の埃及人を救ひ出さむと欲しぬ。然もカイロの電報は頭上より唯一語を下しぬ、曰く、否と。蓋しゴールドンの身(三)形勢已に危急に迫りたれば、ゴールドンは スチュアルト中佐をしてカアツーム及バアベルの守備兵を抜いで北に下らせ、自ら數艘の汽船及び糧食輜重を携へてナイルを溯りてバアルガゼル州に到り、同州を擧げて伯耳義王のコンゴ^ー自由國に編入す可しと提議したり。然もカイロ電報は「否、容易にカアツームを動く可からず」の一句を以て酬ひぬ。蓋援兵は出さずして、然も他の各地の守備兵を(四)見殺にさしたりと云はるゝを嫌ひしならん歟。 (四)今は戦争によらでは守備兵の救援も何もかも出来難しと見たるゴールドンは英兵印度兵の派遣は出来ずとするも、願くは土耳其の歩兵三千騎兵一千を英國の出費を以て蘇丹に送り、且紅海岸スアキムよりバアベルに到る通路を自由ならしめよ。ゴールドンは斯く打電せり。カイロの

返電は、唯土耳其兵派遣は相成らずと、拒絶したり。(註、蓋ゴールドンは飽くまで其使命を果さむとて、固へたるも、本國政府は金をかけ兵を出し)斯く其要求を拒絶したる上に、英政府埃及政府は(甲)ゴールドンを百危千難の中に送りつゝ、其退き口を安全にするの手段をだに取らざり。(乙)是より先き、ゴールドンがヌビア砂漠を度れる頃、東蘇丹のトオカル岩を救はむとせしベーカー大佐の率ゐたる埃及兵三千五百マアヂの裨將オスマン、ヂグナの爲に破られて三分の二を亡なひ、ついで隣岩シンカットに籠れる埃及兵も圍を突かむとして全軍戦没したれば、英政府はゴールドンに照會して別に大した異存は無しとの返電を受けたる後、埃及にありけるグラハム少將に一隊の英兵を授けて、二月下旬紅海岸スアキムより上陸せしめぬ、此一軍はエル、テップ及タマイに於て二回敵軍を破り、三週にして引揚げつ。トオカルの圍をば解きたれど、東蘇丹の敵を一掃してスアキムよりバアベルの通路を障りなく開き置きしと云ふにもあらず。(註、ゴールドンはアラハ

に遊めむことを請ひたれど、本國政府は其請を許さざりき。蓋往來の便宜よき紅海岸に申譯的の兵を出し、のみ、何處までも蘇丹の守備兵を悉く救援するの眞情なりしなり)結果は唯英吉利人押寄せ來て大勢の我亞刺比亞人を殺しぬ、と云ふ警報を全蘇丹に走らしめて、今まで嫌へる埃及人の上に、猶嫌へる英吉利人を相手に取らしめたるのみ。ゴールドンはカアツームにあり、英軍は東蘇丹に押寄せぬ、偕は斯蘇丹をば英吉利人の手に征伏せむと、するか、と云ふ惡感は鼠火の走るが如く蘇丹に廣まりて、今まで觀望の地位に立ちたる種族は憤然として劍を抜きぬ、平和ならば何處までも平和、戦争ならば十分に戦争を遂行す可く、全權を與へなば放任、信任せずば初めより遣はす可からず、一も爲さず、二も斷せず、已に遣はして之を掣肘し、已に平和の引拂と定めて恰も敵の憤恨復讐心を挑發するに足る程の小征伐を行ふ、其手を縛して人を毒蛇の野に驅る、固に不可なり。火を放つて其歸路を塞ぎ、蛇を怒らして其人に向はしむるは、不仁の極にあらずや。東蘇丹の小征伐は、不幸にして、ゴールドンの背後に、火を放ちたるも

のど、ありぬ。

全權と名のりて然も全權の實を行ふ能はず、折角の建策は片端より拒絶され、重荷を負はされ手足を縛られて走れぬと罵らるゝにも似たるゴールドンは切齒しつゝ、猶成す可き所を爲さんと努めぬ。先づ病兵、非戦闘員及び士官兵卒の家族總計二千百三十八人を、猶道路の障りなき内にナイール街道より埃及に下し、一面にはまた油断なく武備を修めぬ。優柔不斷の當局者が倫敦にカイロに心血を注いだるゴールドンの電文を卓上に置いて何時も「否」の一字を斷案とする長會議を開ける間に、カアツーム四圍の形勢は遠慮なく危殆に逼り來れり。マアヂの使者三名、さきにゴールドンがコルドフアン史丹の稱號と共にマアヂに贈りし官服を突戻して、却つて回々僧侶の服一襲を贈り、劍欄に手をかけてゴールドンに向ひ是非共回々教を奉せよと迫りつ。マアヂと談判の望はこゝに絶へぬ。恰も此時東蘇丹に於ける英軍の挑發的運動は、首尾よく

悪結果を奏して、今迄中立の態度をとり居たるカアツーム北面の種族は、續々叛旗を掲げぬ。三月八日、從來味方として算へられたる有力なる一會長が公然マアヂの軍に投じたるの報あり。同日、エルオペードの會長がカアツームバアベル街道を扼せむとするの報あり。センドーに敵軍來襲せむとするの報あり。皆是れカアツームの咽喉に當るの地。三月十日には形勢更に逼り、碧ナイール河上の一村に、數旛の旗を押立てたる亞刺比亞軍充滿すとの報あり。政府の味方として知られたるエルムグヂの會長はカアツーム四近の會長皆敵に内應すと告げ、バアベルカアツーム同時に敵の來襲を受く可しと報じぬ。斯日正午、カアツームよりカイロ府に通ずる電線の中、センドーとバアベルの間、敵軍の爲めに截られて不通となりぬ。翌三月十一日、ゴールドン（カアツーム）はのど、明け行く朝霧の絶間より見れば、見馴れぬ旗を押立てたる軍勢、眞黒く碧ナイールの右岸に蠢めきぬ。敵已に寄せたるなり。

蘇丹引拂は、今や一變してカアツーム籠城となりぬ。

第十二章

カアツーム籠城 (一)

カアツームの名は「象が鼻」を意味す。ナイルの長江地中海に注ぐ河口より溯ること一千八百哩、江水裂けて二派となる。東なるを碧ナイルと云ひ、西なるを白ナイルと云ひ、其間に挟まれたる土地の三角形をなして象鼻の如く突出せる尖端に立つをカアツームとす。河水漲溢すれば、カアツームは宛ながら水上に浮び、河水落つれば三角洲長くあらはれ出づ。三方水に面して、陸地に接するは背後即ち南面の一方のみ。天然の要害なり。

爾く天然の要害あれど、一八二二年の頃、カアツームが初めて埃及領蘇

丹の首府となりし以來、歴代の總督更に敵の來襲に備ふるの必要を感せざりしよりして、一切防備を忽諸に付し、一八八一年マアヂが初めてアツバス嶋に叛旗を押立てたる時は、カアツームの背面陸地つゞきの一方は三尺の垣だに無かりき。爾來三年、マアヂの勢力れさく、悔り難く、埃及の軍しばく、敗虜をとりたれば、時の總督は大に狼狽して、匆々に背面の防備を修め、兩ナイルの彼岸に要砦を造りぬ。然も此等は不完全きはまるものなりき。到着の當日よりゴルドンは敵の來襲遠からじと見たれば、閑を偷むで防禦工事の完成を促しつ。専門の智識は今や最後の場合に用立ちて、土壘を築き、壘前に鏢の八重柵を設け、敵寄せつ可き箇所々に地雷火を伏せ、濠を掘り、工事半ばに敵已に寄せたれば、幾反の大幅木綿を土色に染めて斜めに掛け列ね、遠目に土壘を見せて、其蔭に眞土壘の工事を急ぐなど、洲股河の其にも比す可き妙計をふるひぬ。

當時カアツームの人口は六萬(註、後にはマアヂ黨の者二萬人を出し、約四萬になりぬ。) 戦闘員は埃及兵、黑人兵、シャツギエー兵、義勇兵等を合せて總計約八千人に及びたるも、埃及兵の如き曾てレミントン銃を携へたる兵二百人、唯八人のしかも鎗をのみ提げたる亞刺比亞兵の爲めに散々に駆け惱まされたる程の弱蟲役に立つは唯二千三百の黑人兵即ち蘇丹兵あるのみ。ゴルドンは立派なる吾黒兵士と云へり。唯一の便宜は、武庫造兵廠の設けありて、兵器彈藥の貯少からざるが上に、熟練なる職工夜を日についで一週の間によく小銃彈藥四萬發を作り、また地雷を製し、小舟を組立て、毫も戦闘に不自由なからしめたることなり。此外小蒸汽十三艘あり。ゴルドン自ら指揮して、鐵板木板を装ひ、砲を載せ、早速の砲艦となしぬ。守備線は、カアツームの背面即南面、白ナイル河畔モグリム砦より碧ナイル河畔ブウレ砦にわたりて、濠あり、胸壁あり、延長約三千五百碼。前面即北面には、二川會流の所に横はるツウチーの川中嶋に、幾處の胸壁あり。西

面即ち左手の方には、白ナイルの彼岸、岸を距る一千二百碼にして、オム
 ダアマン砦あり。コルドファン街道の衝に當り、カアツームの片腕とも
 云ふ可き重要な場所なれば、フェルラツチ、ウルラア、ペーに一千三百人
 を授けて、之を守らしむ。東面即ち右側には、碧ナイルの彼岸に北砦あり、
 十三艘の小蒸汽—急製砲艦はかわるく、兩ナイルを上下して敵を惱
 まし、守備を助く、一艘二千の兵に値ると、ゴルドンは云ひたりき。總督府
 は碧ナイルに面して、カアツームの高所にあり、露臺の上より眺むれば、
 兩ナイルの流域かけて方十數哩の間は、砂丘のうねれる、椰樹の茂れる、
 村煙の颺る、砂漠に人の蠢めく、ナイルに馬の飲ふ、皆一望の中に入らざ
 るなし。親ら守備線に立たざる時は、ゴルドン常に双眼鏡を手にして此
 露臺の上に立ちぬ。

一八八四年三月十一日、拂曉碧ナイルの彼岸にコラソと十字架を書き
 たる數旛の大旗ナイルの朝風に翻り、軍鼓の音響々としてカアツーム
 市民の夢を破り、翌十二日敵は近々と攻寄せ、て砲彈銃丸の雨横さまに
 カアツームを襲ひぬ。蘇丹引拂は、今一變してカアツーム籠城となれり。
 ゼベールを請ふては拒絶され、南北引揚を請ふて拒絶され、土耳其兵を
 請ふては拒絶され、東蘇丹に於けるグラハム少將の軍をバアベルまで
 進めむことを請ふては拒絶され、今は蘇丹の各地に點在せる守備兵を
 見棄て、カアツームを逃げ出すか、將た何處までも踏み留まりてカア
 ツームに籠城するか、二者其一を擇ぶ可き運命に會ふて、ゴルドンは猶
 豫なく、後者を擇みぬ。三月四月五月の三月は、六千乃至八千の敵を絶へ
 ず間近に控へつゝ、土壘地雷鐵柵の設備に、食糧收拾の遠征に、間斷なき
 小せり合に過ぎぬ。三月十六日には、數哩の下流なるハルファイエーの守
 備兵を救はむと二千の兵を派遣したるが、指揮を司せりたる二名のバ
 シアの裏切によりて大敗北を來したれば、ゴルドンは軍法會議にかけ
 て、其二名を銃殺し、廿一日に到り再び救援隊を出して、首尾よく八百の

成兵及び兵器彈藥糧食家畜の類を夥しく收め歸り、カアツームの人心を引立てぬ。敵は間斷なく寄せたれど、ゴルドンの伏せ置きたる地雷火しばし功を奏して、敵は死傷を棄てて退きつ。然も叛乱はいよく燃へ廣がりて、セナアルカスサラバアベル其他の成兵盡く敵の包圍の中に陥り、ナイルの一水猶下る可しとはいへ、カアツームは日に孤立の勢とならんとす。四月十六日ゴルドンは電線の猶殘れる部分を利用して、最後の電を埃及駐在英國全權委員サア、エエリン、バアリングにかけて曰く、余が見解によれば目下の状態は左の如し、貴下は援兵を當地にも、バアベルにも送らずと云ふ、貴下はまたゼベールを送るを拒絶す、余は事情に應じて行動するの權ありと思ふ、余は出來得る限り當地にありて支ふ可し、若し力及ばば、叛乱を鎮定せん、若し能はずんば、余は赤道地方に去りて、貴下等に殘すに、セナアルカスサラバアベル、ゴルドンの各成營を見殺にしたりと云ふ不可試の恥辱を以てせん、且埃及に平和を維持せむと欲せば、貴下等も終に非常の大困難を以てマアチを挫くの已むなきに到らん。然も英政府も埃及に於ける其代表者も、直ちに意を決する能はず。ゴルドンは唇を噛むで憤を殺しつゝ、いよく籠城の手段を盡しぬ。總督府はカアツームの高所にあり、ゴルドンが好むで其露臺の上を彷徨するを敵はよく知りたれば、二千二百碼を隔てしゴバに砲臺を築きて、日夕總督府に砲彈を飛ばし、小銃の雨を注ぎぬ。然も、ゴルドンは平氣に其間を往來し、銃丸しばし足下に落つれ共、終に微傷だも負はず、總督府の庭上より機關砲を以て盛に答射せしめぬ。麾下にスチユアルト中佐外一兩名の歐人ありて、主將を助けたるも、ゴルドンの勢は非常なりき。守備の整頓、作戰の經畫、糧食の世話、或は間斷なく敵の諸酋長と文通して其志を翻さんと試み、或は敵線を潜りて斥候使者を遣はし、訴を聴き、金を作り、病院を見舞ひ、貧民を養ひ、因循ある本國政府及び其代表者との往復、晝は働き夜は警め、内なる隱謀を抑へ、

外には次第に勢加はる敵に抵る、其苦心實に言ふ可からざるものありき。カアツーム在留英國領事代兼タイムス新聞通信員フランク、バワア氏が通信は、纔かに籠城中のゴルドンの生活の一斑を示す。

ゴルドンは實に愛す可き人物なり。穩やかに、温順に、柔和にして且強し。而して如何にも謙遜なり。彼が人の肩をたゝきて「ねエ君、何かいゝ考はあるまいか」と云ふさまは、人をして愛着已む能はざらしむ。彼れ戶外に出づる毎に、門邊には夥しき亞刺比亞男女群集して、彼の足を接吻す。今日も氣早き婦人等が彼の足をあげて接吻せむとして、誤つて彼を倒すこと二回に及びぬ。大勢の婦人等日々此處(總督府)に群がりて、其子供に手を觸れて、病を癒さむことを願ふ。彼等はゴルドンを「我等の父、蘇丹の救主」と呼ぶ。彼は毎日トーマス、アケンピを讀む。余が之に通せざるを見て、余に「基督之摸倣」を與へぬ。余は信ず。彼は實に現世紀の大偉人大善人なりと。

また曰く、

余は日々ますます、ゴルドンを好む。彼は尤も愛すべき容子と愛す可き性質を有し、如何にも余に親切なり。聊にても非常なる其勞を助けむとするの意を表すれば、彼は喜ぶなり。如何にして、彼の様な劇務をば敢て一人の身に引受くるを、不思議に堪へず。彼の骨折と煩擾とは、唯一日にして別人を殺す可し。然もゴルドンは朝餐にも、午餐にも、晚餐にも、常に如何にも快活なり。さりながら余は彼が恐ろしく氣鬱に悩むを知るなり。余は彼が夜すがら行きつ戻りつ其室内を歩するを聞く。彼の室は余の室に隣れり。彼を扶け行くものは、唯其非常なる敬虔の一念あり。

バワアは加特力教徒なり。ゴルドンは籠城の少閑に、しばしば共に宗教談をなしぬ。彼が寸隙を偷ひで讀みたるものは、聖書は云はず、次ぎは「基督之摸倣」また別に英國加特力派大僧正ニウマンの著せる小詩卷「ゲロ

ンシアスの夢と云ふものあり。ゴルドンは百忙の暇々に讀みて、會心の箇所に附線し、評語をペーヂの餘白に記入なきいつ。後之をパワアに與へ、パワア之を英國の己が家族に送り、斯くて與へし者も貰ひし者も空しくなりし中に一卷の書獨り無難にカアツームを出で、世に残りしが、其巻中の

今や時來つれば、吾恐は逃れぬ。

吾爲に祈れ、あゝ吾友よ。

死なり、あゝ愛する友よ、汝の祈を恵め、彼(死)なり。

吾友よ、祈る力も無き吾爲に祈れ。

此間時をばよく用ひよ。

爾が神に會ふ覺悟せよ。

いざさらば、愛する兄弟、さりながら限りなく別れむどにはあらず。

哀の床にも勇め、忍べ。

など云ふ句の下には、深々と鉛筆の線をひいてありき。

(註)スゲロンシアスの夢につきて、モウンドなる人よりゴルドンの姉

妹に寄せし書翰の一節に曰く、

御舍弟出發の當日、曾て御尊父の臨終に際し遺骸を眺め、斯が我々最後の運命なるかと思はれしより其精神的生涯に一變を來したる事を小生に御話に相成候。其が緒になりて、死と云ふ事に關し長時間の談論を致し、偕小生は御舍弟の意見はニウマン博士の小著「ゲロンシアスの夢」を想はしむる者有之と申候所、讀んで見たしどの御話にて、小生は追かけて埃及へ送り申す可しと相約し申候。偕御舍弟は一八八四年三月七日カアツーム發の葉書にて、右の書の受取を御寄越し奉りされて曰く、

親愛なるモウンド君足下 一月廿五日附の貴書今日到着。小生は吾老友の安息(死)

し玉ひしを喜び、親切なる貴家の方々の慰めを得玉はむことを望む。貴家一同過る

一年の間に如何ばかり思む可き災難を経過し玉ひしぞ、小生の負擔などは、まだ、樂に候。彼書御惠贈、多謝。小生も今は吾老友の家族の爲に祈る可く候。小生は當地に参りし以來、曾てパレストアインにありし時よりも尙多く知己朋友の爲めに代つて祈り候。ジョツプ其友の爲に祈れば、上帝は彼の患難を濟ひ玉ひき(約百記四十二の十)貴君の祈禱は小生の軍勢なり。皆々様へ吳々宜敷。

足下の信友

シー、ジョー、ゴールドン

斯葉書はゴールドン將軍が人に代はるの祈禱を深く信せられしを示すのみならず、最早其頃に於てすら、カアツームの模様の孤立殆ど望無き有様なりしをト知す可く被存候。御舍弟も失敗を豫想し玉ひし事は、小生よく知り申候。告別の際、小生は御舍弟に向ひ途中安全成功を望む旨申述べしに、御舍弟は左の通り御答へ成され候。誰も失敗はすべきものなり、失敗せざればあまり自己の力を信じ過ぎるなり。僕も今迄は成功し來れり、此れからが失敗なり。願くは謙遜にして、上帝の導を仰ぎ、上帝の聖旨に順はむと。

ナイルの漲溢期とありて、カアツームの形勢や、よき方に向ひぬ。兩ナイルの水まさりて、敵は少しく其陣を引あげ、短兵急に攻め寄せず、唯間斷なく砲銃を發射して、守兵を困憊せしめ、且は兵糧攻の策をとりて、終にカアツームを陥れんと計りぬ。此時マアヂは猶コルドファンにあり、寄手はエル、オベード、ネグミの兩酋長之を率ゐたり。ゴールドンも此機に乗じ、しばし突撃隊を出し、また彼汽船を出して日々敵を惱まし家畜を収めぬ。七月廿九日には、陸面守備線の東端碧ナイル河岸のブル附近に夥しく屯集せる敵兵を追拂ひ、ついで汽船は碧ナイルを溯りてエル、ファウンに到り、敵砦十三ヶ所を掃蕩し、八月廿六日再び大遠征してこたびは大敗北をとりぬ。是より先き、六月廿五日ゴールドンはナイル街道スアキム街道の交叉点として、まさにかアツームの咽喉たるバアベ

川終に敵軍の陥るゝ所となり、三千五百の軍民盡く殺戮せられ、汽船二隻また敵の分捕に歸したりと云ふ報を聞きぬ。已に前面の歸路を絶たれ、今また背後に大敗を受く。蘇丹引拂は無論、カアツーム引拂も今は覺束なき境涯となれり。

カアツームは今や全く敵中に孤立するとなりぬ。籠城の初より已に六ヶ月、士卒を喪ふ七百餘、剩す所三月の糧のみ。幾回が敵中を潜りて救援の飛使を派し、截餘の電線を利用し、危急の旨を告げたれど、請求拒絶の返事だに來らず。スナイルの川下には蘇丹の領主の埃及政府あり、カアツームより急行八日にして到るべき倫敦には世界無双の富強を誇る英國政府あり。夥しき金を擁し、兵を擁して、然も斯危急は耳に入らざる乎。恐らくは使者達せず、事情通せず、斯救援の遲緩を來すなからんや。今一應試に急使を派せむ。時は九月の初旬、ナイルの漲溢は絶頂に達して水量尤も大に、カアツームより一千八百哩の水程を遮る幾多の岩礁隠れ、

瀑布は肥へて矮く、通常帆船もよく流に従つてカイロに到るの時節、急使の船を出すには實に失ふ可からざるの好時機なり。ゴルドンは此時機に乗じ、一艇の小蒸氣に亞刺比亞人の船長を乗組ませ、ドンゴラまで下して、同處より電報をかけさすに定めぬ。カアツームには今八艘の小蒸氣あり。就中アツパス號は吃水二呎に満たず、操縦容易の小蒸氣なれば、之を遣すと、なしつ。スチュアルト中佐、英國領事、パワア、佛國領事アルピン皆行かむと請ふ。ゴルドン曰く、居りて詮なく、行くに功あり、行けど命令は下し難きも、行かむとならば強いてとゞめずと。即ち意に任せて斯三人を乗組ましめ、一八八四年一月三日より九月十日に到る精細なる籠城日記、ドンゴラよりかく可き電文、報告書、其他一切の重要書類を積込み、護衛兵として希臘人十八名、兵士約四十名、砲一門を載せ、警護の汽船二隻に送らせ、九月十日の夜をこめて纜を解かせぬ。いざさらば、愛する兄弟、さりながら限りなく別れむとはあらずと。パワアに與

へし「ゲロンシアスの夢」の一句を思ひ出でしや否や。握手一匝、アツパス號は流を追ふて忽ち闇に没し去れり。斯くて去る者は夜と共に去り、はのく、明け行くカアツーム、曉寒き督府樓上には色蒼き人唯ひとり残りぬ。

請ふ余輩をしてしばらくカアツームの寂しき人を措き、アツパス號のあとを追はしめよ。九月十日二隻の護衛船に擁せられて、カアツームを解纜したる同號は、六番瀑(カイロ)の方より算へても無事に過ぎて、センデーを通過しバアベルに到り、此處に蹣れる敵軍に砲撃を加へつゝ、難なく此關所も通り、數哩の下流に到りて、今は前程に懸念少あしと、爰に二隻の護衛船を還へして、獨り流に従つて下りぬ。斯くて五番瀑も事無く通過し、弓に譬ふるナイルの大曲りの下筈に當るアズウ、ハメツドを過ぎ、十月六日已にカアツームよりドンゴラまでの水路の三分の二強を過ぎて四番瀑の附近に到りし時、忽然岩に乗りかけつ。スチユアルト

中佐以下兵器を棄て、匆惶岸に上り難を避くる折から、モナツシル種族突如として襲ひ來り、押取籠めて一人も残らず討取りぬ。斯くて、求援の使者は使命を果さずして、呑恨の鬼となり、六ヶ月の籠城日記を始め重要な文書は盡く敵の手に入りぬ。四ヶ月の後、援軍ナイルを溯りて斯處に到れば、岩上にはアツパス號の殘骸微塵になりて横はり、血染の紙片など風に吹かれて砂上に翻り居るを見たり。

求援の使者は途に亡びぬ。援軍終に到らざる乎。日子を算すれば、アツパス號遭難の其前々日、救援軍司令長官ウルズリー將軍は、實にワヂ、ハルファ(カアツームより約六百哩)に着し居たり。而してアツパス號のカアツームを出でたる其日は、不思議にも救援隊及びナイル河用小艇を載せたる汽船の初めて英國を出帆したる其日なりき。

若しバアメルストーン若くはビーコンスフィールドをして一八八四年の英國政府に立たしめば、晚くも三月末には援軍已に英國を出發した

るなるべし。不幸にして、總理には内政に長けて外交に短く、平和を愛して戦争を厭ひ、國庫の金を出すに濫り勝ちなるグラッドストーン氏あり、外務には温順にして斷の一字を缺けるグランギル伯あり、而して埃及在留公使に煮へされぬバアリング氏ありて、彌が上にゴルドンの頭上に立ちたれば、電光石火の運動を唯一の手段とするゴルドンを悶殺煩殺苦殺終には屠殺するに到りしなり。國民は流石に政府よりも早かりき。衆議院の在野黨は頻りに蘇丹問題に關する質問を持出し、政府の因循を非難する人民の聲は次第に昂じて、五月八日聖ゼームス館に於ける大會とあり、

本會は、女皇陛下の内閣がゴルドン少將を放擲するは、内閣の不名譽、國家に對する不面目なるを宣告す。

と云ふ決議案を通過したり。然も政府は繰り返へしてゴルドン少將の安全なる事、任意にカアツームを去り得可き事を保証し、政府は人民よ

りも蘇丹の精細なる情報を知悉するを以て、必要の場合には何時なりとも應急の手段を取る可し、局外者濫りに容喙するを須ひず、と斷言しぬ。成程カアツーム籠城の初數ヶ月間は、他の敵中に陥りたる諸戍營をだに見棄て、去らばカアツーム引拂は出來たる可し。最後の場合となりても、カアツームの軍民をだに見棄てなば、獨り汽船に乗じて赤道地方に逃るゝも易々たりしなり。然も此はゴルドンの肯て爲さざる所なり、さる訓令をばゴルドンは斷じて勿ねつけぬ。曰く、余は斷言す、蘇丹を去らんと欲する者の一人も残らず。然爲す可き便宜を興へらるゝまで、余は決して蘇丹を去らじ。と。また曰く、余は一切蘇丹を去る可き命令に従ふ能はず。此處に留まり、カアツームと共に斃れむ。と。命を重んずるの使臣は援兵を請ふても蘇丹の守備兵を救ひ出さむとし、金と兵とを吝むの政府は援兵は出さずと。うにか甘く都合せよと云ひ、交渉に時移りて蘇丹の戍兵は問はず、今は使臣其人の命危くなりぬ。然も政府は使臣の

命を救ふにすら金と兵とを吝むで、まだ大丈夫なる可し、危くば他を捨て置きて獨り勝手に逃れ來よ、兵も金も山程あれど其は九分九厘九毛まで押つまらざれば出し難し、と云はむばかりの態度を取りぬ。流石に英國人無きにあらず、ゴールドンの友人にして陸軍部内の大立者なるウルズリー將軍の如き四月の頃よりして蘇丹出兵説を唱へ、路をナイルにどり、小艇を用ひて溯る可しと説き、其後幾度となく政府に迫りたるも、政府は容易に斷せず。月移るに従ひて政府の優柔不斷をもどかしがる内外の聲は次第に高ふなり、政府も到底援兵派遣は已む可からずとればろに感ずるに到りしが、偕其救援の方法、此れ又中々一朝夕の議にあらず。ナイル河を溯るとすれば、河口よりカアツームまで水路一千八百哩、逆流航行にして、殊に六箇所の瀑布あり。或者は頻りに紅海岸スアキムよりバアベルまで鐵道を敷設し、以て、カアツームに至るべしと説きぬ。然も英政府がゴールドンの言を用ひずして斯方面の街道を忽にし

置きたる爲め、スアキムバアベルには敵軍雲集し居り、而して斯兩所の間には山路往々海拔三千乃至四千呎の高きに達し、八十哩の間一滴の水無き地を通過することなれば、此敵を拂ひ此線路を成就するは二年の月日を要すべし。然もスアキムバアベル鐵道敷設の經畫は座談にあらず、已に請負まで募りて、埃及より官吏を英國に派し、唧筒もてスアキム灣より約一百哩を隔てたる海拔三千五百呎の場所(即ち八十哩の間一滴の水無き地)に厭搾せる水を送るを得可きや否やにつきて、短距離試験をなしぬ。然るに試験の結果、成程唧筒により遠距離に水を送るは成るまじき事にはあらざれど、三哩四哩に及べば水は宛ながら熱湯となりて出で來るのみならず、諸般の費用を概算すれば斯く唧筒にて送りたるスアキムバアベルの中間の高地に於ける水一升の價は殆んど極上の葡萄酒一升到に値るとの事にて、バアベルスアキム鐵道の經畫は其まゝ中止となりぬ。カアツームの籠城者が苦慮、焦心、髮も白ふなる

ばかり援兵を待たざる間に本國にては悠々ど斯る長評議に五月六月七月を過ごしぬ國民の叫びはいよく高ふなれり。ゴルドンが英國を出發したる頃は其名を知る者甚だ多からず(註、ハムブロークの一紳士、チヤイニース、ゴルドンが蘇丹に赴く云ふ新聞の記事を讀みて、政府はゴルドンと云ふ支那人を蘇丹に遣はさうだ、支那人を阿布利加に遣つて如何するのだ、と或士官に語りしと云ふ事實あり。ゴルドンの譯名を支那戈登と云ふ)カアツームの名は殆ど耳にしたることなかりし者も今はゴルドンを救へ、カアツームに援軍を送れ、と言はざる者なきに到れり。政府も今は黙止し難く、八月初旬に到り初めて救援軍を蘇丹に派遣する旨を公にしたり。ゴルドンが初めて援兵を請ひしより、こゝに至りて五ヶ月過ぎぬ。

八月十二日遠征軍はいよくナイル水路を溯ることに定まり、無類の工匠夜を日についで短艇を作り始めぬ。同廿八日ゴルドンとも埃及とも因縁深きウルズリー將軍遠征軍司令長官に任せられぬ。斯くて短艇及び遠征軍の一部を載せし汽船初めて英國を出帆したる九月十日不

幸ある求援の使者をのせしアツパス號がカアツームを出でし日には先發したる司令官は已にカイロに着き、同十七日の頃には眞先に埃及より繰り出したる歩兵大隊はマアヂの勢力範圍と埃及領と相接するの境に當るドンゴラに着きぬ。若しゴルドンをして此際に處せしめば大部隊を後にして、自ら殊死の一隊を率ゐ、突貫長驅してカアツームに達せんと努む可し。然も斯る不識慮一流の神經質なる兵法は、ゴルドンに望む可くして、彼十分に利害を打算し、大事をとり、謀を好むでなす機山底の輜略家たるウルズリー將軍に求む可からず。將軍もまた一個老練の名將、險を冒して進むに急ならざるにわらずと雖も、奈何せむ、海を越へ砂漠を度りて遠く大兵を蘇丹に動かすは一朝一夕の勞にわらず、ナイルを溯る短艇も作らざる可からず、砂漠を渡る駱駝も買ひ入れざる可からず、英國に於てカイロに於て折角の送別の宴にも列せざる可からず、兵員馬匹砲短艇及百般の輜重を英國よりカイロに輸送せざる

可からず、途に上れば未だ敵と鋒を交へざるも先づ馴れぬ暑も凌がざる可からず、ナイルの瀑布とも闘はざる可からず、尺蠖の進むが如く、一屯所に進むでは集中し、また進むでは集中し、斯くて此れよりいよく敵地に踏み込むと云ふドンゴラより先鋒隊の出發するは實に十一月に入るを免れざるなり。

余輩をして小艇を曳き駱駝を驅り汗になりて徐々に上り來る遠征軍をカイロとドンゴラの間に残し置き、一千哩の上流なるカアツームに立かへらしめよ。

九月十日アツバス號が、スチユアルト中佐バワアルビン等を截せて去りし以來、煩勞と寂寥は倍の力を以てゴルドンの頭上を壓しぬ。同廿一日に到り、初めて援軍已にナイルを上りつゝありと云ふ確報に接し、ゴルドンは纔かに眉を開き、カアツーム城中皆欣々として生色あり。當時マアデは猶コルドファンにあり、戦は砲銃彈の遠距離交射にとゞま

りて、敵軍甚だ緊迫せず。一百哩の下流なるセンデーまでは、水路はもとより、陸路猶遠するを得べし。ゴルドンは此機に乗じ、速やかに援軍を迎へ來らしめむと、一隻二千の兵に値ると云へる頼切りの武装せる小蒸氣の中四隻を割いて、四百の兵を載せ、九月三十日を以てセンデーのやゝ上流に當るナイル西岸メテムメーに遣はしぬ。豈に知らむや、援軍猶隔つる一千哩、メテムメーに達する實に四ヶ月の後ならむとは。

アツバス號の解纜以來、九月十日を起筆として、ゴルドンは閑を偷むで夜々詳細なる籠城日記を書きぬ。九月十日に到るまでの籠城日記は、アツバス號の遭難と共に敵手に落ちて、終古其跡を滅したるも、九月十日より十二月十四日に到る日記は悉く援軍の手に入りて、出版せられ、永くゴルドンの英國民に残せる遺物となれり。戦闘記事あり、圖解あり、感想を記せるあり、冷語を以て滿腔の悲憤を出せるあり、寸毫も隠さず、其胸臆を傾け來りて、直ちに其靈魂を見るの想あらしむ。試みに一二節

を摘せむ歟。

籠城中、余等はしばしば恐怖と云ふ問題を討論せり。世間の見る所にては、男兒決して恐怖を懐く可きものにあらずと云ふ。余の如きは常に恐怖す、非常に恐怖す。余は戦闘毎に成行を恐る。其は死の恐怖にあらず、神に謝す、死の恐怖はとく過ぎ了りぬ。然も余は敗北を恐れ、又敗北の結果を恐る。落つき拂つて少しも動せぬ人ありや、余は更に信せざるなり。其は唯其人が外にあらはさざるのみ。故に余は斷言す、凡そ大將たる者は常に山猫の如くに己を注視する。眼下の者とあまり近しく生活す可からず、何となれば世には恐怖はを傳染し易きものあらざればなり。余が心配の爲め食する能はざる時は、同じ食卓につける輩、皆同様の影響を受くるより、余は幾度躍起となりたりしぞ。

また曰く、

余思ふに、小戦術篇乃至幾多戦術に關する著作を讀ませんよりは、我

青年士官をして、ブルタアク、英雄傳を研究せしむるが得策ならん。彼英雄傳中には人々(何の眞信仰ありて扶助すると云ふにもあらず、醉乎たる異教徒ながら)皆當然の事として己が生命を犠牲とするを視る。然るに今日の世の中にては、逃げ出さるを以て最極上の手柄とす。余は實に恐ろしき心痛をなしぬ。余一己の皮膚の爲めに心痛するにあらず、たい余は負くるを惡むが故なり、吾經書の敗るゝを見るを惡くむが故なり。さりながら余が苦心の如きは、氣むづかしき患者に附添ふ看護婦の苦心の十分一にも當らざるなり。同日の談にあらず。また曰く、

余がスチユアルトと共に逃れざりし理由につきては、さまざま所説も多かる可しと雖も、實は唯斯くの如きのみ。即ち當カアツームの民は余を取りにがす程の馬鹿にあらずしが故なり。されば献身なんとせよめかす「外套」も己矣哉。著者云、善に伐らず、功に居らざるは、ゴル

ドンの美質

また戯れて曰く、

當地に残れる少數の歐人中、其一人は狂せり。

本國政府及びカイロに於ける英國全權委員の舉動を考へては、ゴルドンも流石に憤の胸を摩りぬ。斯る際にゴルドンを扶けたるは、悲哀の快感に於ける如く、滋味苦味の中に可笑味を見る滑稽談話の趣味なり。埃及の災難に對して責ある某外交家を嘲つては「妖魔」と呼び、斯く危急の際になりて糧食彈藥何時までつゝくや精確なる報告を送れと云ひ越し、某大官を嘲つて、某君は多分統計學上の大著述でもせらるゝと見へて其材料を求めらるゝならんと笑ひ、

一寸己が役所の書類室あな快よき字やを調べたらば、我儕が幾月も々々々已に糧食に不自由を感じ居るとは分かる筈なり。宛ながら岸上に立つ人の、其友の川にはまりて已に二三度も沈めるを見て、聲を

かけおいゝ、君何時浮囊を投げるんだ、知らして呉れたまへ。最早君も二三度沈むだのは知つて居るが、併し絶体絶命まで行かずに浮囊を投げるのも馬鹿らしいからね、はつきりした事を聞きたいのだと呼ぶにも似たらすや。

また思ひかへして曰く、

成程わが上に立つ人を嘲るはよからずと知る。然も余は惡意を以て斯くするにわらず、斯く云はれたる人々幸に怒るなかれ。人生の事甚だ重苦し、誰にてもよく之を輕ふするを得ば即ち可ならずや。

また曰く、

余は政府にも其役人にも甚だ不從順なりしを自白す、併し此は余が性質あれば、奈何ともする能はず。余若し長官たらば、余は決して余自身を属官に雇はざる可きを知る。余は始末におへぬ男なればなり。

十月となりぬ。籠城の第八月は生まれり。形勢は猶依然。二十一日亞刺比

亞曆の一三〇二年正月元日なり。斯日重大なる報道二つ、ゴルドンの許に達しぬ。一は自からカアツームを攻め落さんと、マアヂが親兵を率ゐてコルドファンより來れるなり。一はアツパス號遭難の報道なり。ゴルドンは猶虚報を萬一に望みぬ。然もやがて白ナイルの對岸なるオムダアマン砦より、一通のマアヂが書を取次ぎて送り來り、其書にはアツパス號より分捕せる往復書簡書類の數は云々、種類は云々、大要は云々、細かに列擧したり。ゴルドンの頭上に精神的大打撃を加へむとせるなり。然もカアツームの英雄は一撃を受けてたぢろかず、直ちにオムダアマン砦に打電して曰く、マアヂに告げよ、彼れに仮令アツパスの如き汽船二萬隻を奪ひ、スチユアルト、バシアの如き將校二萬人を殺すも、余に於て何かもあらん、余は新來の英吉利人に援兵の事を見るの望みを有す、然れども、マホメット、アーメット（即ちマアヂ）にして若し此英人に註、ゴルドン自身死せよと云は、其もまた可なり、余は鐵の如く此處に在りと。

斯日より敵の攻撃は一倍の緊を加へぬ。マアヂは已に援軍のナイルを溯りて近づき來るを聞知し、またアツパス號より分捕したる書類によりてカアツームの人數彈藥及び食糧の如何を精密に知りぬ。マアヂ先づカアツームを陥るゝか、援軍先んじて着するか、今は援軍とマアヂの競走となれり。守將の苦心はこゝに到りてまた更に倍しぬ。當時カアツームの兵力は、黒人兵二千三百十六、埃及兵千四百二十一、バシバゾク兵千九百〇六、シャツギエー兵二千三百三十、義勇兵六百九十二、總計八千六百六十五に及びたるも、此内僅かに頼む可きは黒人兵のみにして、餘は五百の敵軍オムダアマン砦と白ナイルの間に平然と割り込む進むで撃たず、碧ナイルの東岸に千三百の兵を有する此砦あるに關せず、二百五十の亞刺比亞勢悠悠と其前を過ぎ行くも、砦兵固唾を吞むで默過する程の有様なれば、敵勢八千に過ぎざるも、ゴルドンは日記に書して「形勢大危急」と云ふの已むあきに到れり。守備線に架設せる砲數十二

門汽船十三隻の内、二隻はバアベルにて一隻は碧ナイル上流にて敵の手に落ち、一隻はスチユアルト一行の遭難に亡び、一隻は沈没し、五隻は援軍を迎ふる爲めメテムメーにあり、剩す所唯三隻にして、一隻は船渠にあり、食糧は十一月二日の調査によれば、六週間分を剩せり。六週間にして援軍果して到る可き乎。食糧半減となす可き乎。久しき籠城に士卒の氣已に挫けて、唯援軍近しの一語と、主將の吹込む精神によりて支持せらるゝ今日、手下の將校中にもマアヂと内通の嫌疑ある者三四にして足らざる今日、頼む所は唯黒人兵、食糧半減は其黒人兵を離散せしむる所以なれば、今は唯運を天に任せて糧食の續く限り固守す可きのみ。籠城より第九月の十一月となりぬ。三日、メテムメーに遣はし置きたる汽船の中一隻ドンゴラよりの書翰を齎らし來れり。アツパス號の遭難は最早疑ふ可くもあらぬ事實となりぬ。ゴルドン足すりして曰く、此は二人のバシアを殺したる報なりと。二人のバシアとは過る三月ハツフ

イエー若救援の際敵に内應して味方を敗北せしめたりとの廉を以て銃殺せられたる者なり。書翰の中に、十月十四日の日附を以て、デツペーより發したるキツチナル少佐(註、當時通信部の將校たり、遠征軍の前衛として、カア丹討平の大功を奏し、近年トラツツ、スツアル戦争の大立者となれり)の書翰あり、遠征軍司令長官ウルズリー將軍はワヂ、ハルファ(註、カアツ、リ約六百哩)にあり、遠征軍は十一月一日を以てドンゴラを出發す可しと。外に九月二十日附ウルズリー卿の亞刺比亞字暗號電報一通を封入しありたるも、不幸にして暗號帳はアツパス號と共に去りたれば、終に讀まれずして已みぬ。斯等の書翰を包みたる古新聞紙を、使者解き棄てたりしを、人あり拾ひて其英字あるを見、英語を解する病院の藥劑師に齎らし、傳へてゴルドンの手に渡りぬ。ゴルドン日記に書して曰く、斯古新聞は宛ながら金の如く貴し、一八八四年二月廿四日以來終に新聞を見し事なければと。其古新聞は九月十五日發兌の倫敦新聞中に「ゴルドン救援軍」の消息を詳細に報道せり。「ゴルドン救援

の字を見て、ゴールドンは唇を噛み、日記に大書して曰く、否、蘇丹守備兵の救援也」と。ゴールドンは已に屢、吾は救はるゝの小羊たるを欲せず」と言ひぬ。自ら第一號蘇丹守備兵救援軍と稱し、ウルズリーの遠征軍をば同じく第二號となし、其決心を書して曰く、若しカアツーム陥落前に遠征軍到着、此は覺束なしし、而して直ちに當地を立退きカツサラセナル以下守備兵は見棄つ可しとの訓令ならば、余は直ちに辞任す可し………余は蘇丹引拂を行ふ爲めに蘇丹總督となりぬ、カアツームを逃げ出し、各所の守備兵を打棄つる爲に蘇丹總督となりしにわらず」と。

(註)此月五日の日附をもて英國なる姉に寄せし手翰に曰く、

八月七日附の君が親切なる手紙昨日着きぬ。マアチは近々と寄せ居れり、併し亞刺比亞勢は甚だおとなし………

余は援軍を待受くる爲め、瀛船をメラムメーへ遣はしぬ。援軍の余を救助の爲めに來ると云ふ事には斷じて同意する能はず、援軍の來ることならん。

デヨン王(註) アビシニア國王)余に手紙を寄越せし由なれど、其書はマアチの手に押へられぬ。余はスチユアルトに托して、余が室の窓を穿ち來し彈丸を入れたる小包を君に、猶ブロッケンハルストにも幾振の劍其他品を送りしが、多分皆敵手に落ちたるならん。何事も天意よき様に指圖し玉ふ。余は頗る息災なり、但始終神經を勞する故、甚だ年寄りぬ。余はイスラムカチーの兩酋長を禁錮し置きぬ。二人はマアチと文通の嫌疑ありたる故なり、併し昨日免しぬ。

余はスチユアルト バワアルビンの家族の爲めに哀痛に堪へず。

此月の籠城日記の一節に曰く、

ウルズリー 卿果して數ヶ月内にカアツームを救ふの望ありと云は

れしならば、卿は余等が耐忍力につきて驚く可き信任を有たれしものかな。卿が此言を爲したりと聞く其時は、余等は已に六ヶ月半の籠城をなし、今は已に九ヶ月目になれるを知らずや。

また曰く、

こゝに一事の更に解す可からざるものあり。今遠征軍を送るが是ならば、其前に送るが何故に非なりしや。政府の困難も考へねばならずなんどの言譯は兎も角も、政府は余輩が斃るれば遠征軍を出す必要もなしと云ふ望を懷き居たるにあらずやとの感情は中々打消し難し。個人的には、余も此事につきて格別憤怨を懷くにあらず。然も有体に云へば、其何人たるを問はず、斯る計算的の行動を爲す者をば、余は苟にも好むふりする能はざるなり。人は偽善者の真似して彼輩に懇情を懷くふりするの義務なし。イートン若くはハルロウ(註、共に名高き英國中學)の子供が其仲間に對して斯様の舉動をする時は、必ず

蹴らる可しと余は思ふ、而して蹴らるゝの値ありと余は信ず……余は守備兵放棄、不放棄の問題を批判せず、余が批判する所は、政府の不決断なり。政府は「守備兵を放棄せよ」と得云はず、故に余を救はざるの決心と、或一の望好、余は其望の何ものたるを云はざる可しを以て、余が赤道地方に去るを許さざるなり。

一日又一日ゴルドンが戯れに「日々の御馳走」と呼べる敵の攻撃はいよゝゝ劇しくなれり。十一月十二日には、マアチ自から親兵を率ゐて攻撃を開始し、オムダアマン砦及びビスメリア、ハスシニエーの兩汽船に向つて劇しき砲撃を加へぬ。劇戦七時間、ゴルドン曰く、余は斯數時間に數年を過しぬ。敵は一千二百碼の距離より汽船を目がけて三百七十發を發射し、ハスシニエー號は大破して終に沈没し、イスメーリア號も砲彈七個まで受けぬ。然もゴルドンは苦戦の末幸に敵軍を追拂ひつ。此戦に味方の發射したる銃丸五萬發の上に出でぬ。日記の一節に曰く、

午前三時困倒して睡る。軍鼓鳴る——鑿々々々、鼓聲夢に入る。やゝありて少しく醒め、腦裡認め得たり。身はカアツームにあるを。次ぎに疑ふ、彼鑿々は何處ぞ。止まんか、どの望起る。否、止まず、いよく劇しく鳴る。……今は詮無し、是非なく起きて、督府の屋上に出づ。其れより電報命令、悪口、罵詈して、午前九時に至る。……見得たり、彼小畜、ハスシニエー一號が恐ろしき後装銃の發火の下に、舳を先に退くを見得たり、一個の砲彈其舳邊の水を撃つを、余は彼女が進行を止めて沸々蒸氣を吐くを見、死ぬばかり胸をわるくし、双眼鏡を侍童に渡しぬ。……吾童三十歳なり曰く、ハスシニエーは病みて候。余は素より知れり、然もさり氣なく云ひぬ、下りてモグリム(砦)に打電せよ、ハスシニエーは病めりやと」

病めるにあらず、ハスシニエー一號は死して、兩ナイルの水路をかけて攻守警戒の用に宛つべきもの今は唯イスメリア一號一隻を剩すのみとな

れり。翌十三日マアデは一軍をオムダアマン砦と白ナイルの間に進めて同砦を孤立せしめ、またカアツームの北面に一軍を遣はして、全くカアツームを包圍し終りぬ。

砲撃銃射日夜に止まず。三月以來の籠城に精神を竭したるゴルドンは非常に神經過敏となりて、わづかの物音にも愕とするに到りぬ。氣も短かくなれり。日記の一節に曰く、

電信技手(註、カアツームカネロ間の電線は絶へたるも、カアツームよりオムダアマン砦北砦などへ短距離の電信は通ぜしなり、)重要の

電報を余にとゞくるを怠りたれば、余は忿つて其鬚をうちたり。已にして余が良心頗に余を刺戟すれば、余は彼に五弗與へぬ。彼云ふ、打殺されても遺憾は無之、君は吾父にて在せば云々(彼はチヨコレー色の二十歳ばかりの若者なり)

此月廿一日の日記に曰く、

今日吾老書記ラツクダーが盜罪を發見しぬ。疑ふまでもなければ、即

ち免職し、ペーと爲すの議を取消すべく書き送れり。一婦人亞刺比亞軍中より来る云ふ、遠征軍はメロエを立つてバアベルに向ひぬ、而してモハメツド、アーメツト(註、マアヂの實名)は來月曜日、十一月廿四日を以てオムダアマン砦を取らんとすと、嬉しからぬ報道かな。併し、余は力の限り盡しぬ、今は唯信じて待つ外に道なし。唯困るは、一人として余が信頼し得べき者なき事なり、一人としてきまりきりたる職掌以外になす可き事ありと思ふ者のなき事なり。籠城となりて已に數ヶ月、形勢實に危殆なり、然るに今日も書記長及其屬官を除くの外、余が幕下の輩一人も出頭する者なし。余は召喚の使者をやり、彼輩が来る迄待たねばならず、——恐らくは一時間も……一局として余自から直接に其長官たるかの如く仔細に監督するの必要あらざるはなし……吾生懶しと云ふも、誣言にあらざらむ。日又夜、夜又日、余が生涯は間斷なき苦勞なり。

(著者云、埃及官吏の因循と私曲には、ゴルドンも氣を腐らしぬ。官吏もゴルドンの勤勉と清廉には、手痛き苛責を蒙りぬ。ゴルドン自ら己れの性急を咎めて曰く、余が當地に來りし以來、武官文官の輩に犬同様の生活をなさしめぬ、余が督責は日々彼等が腹部の刺輪となれり、余は斯虐待を忘るゝ能はず、余は實に一瞬の安息をも彼等に與へざりしなり、彼等は實に仕様のさき輩なれど、余は今少し斟酌す可かりしなり云々)

二十二日ゴルドンは籠城當初よりの死傷を精査して、死者一千八百餘、傷者二百四十二名を得たり。激戦絶間なく、日々此方より發射する彈藥は四萬發の多きに上れど、此割合を以てするも彈藥は猶四十日を支ふ可く、而して食糧の餘殘は實に三十日を支ふるに過ぎず。ゴルドンは日々夜々彼方に馳せ此方に廻りては、援兵近し、耐忍せよと戰鬥員を勵まし、非戰鬥員を慰めぬ、然も敵軍の意氣込、味方の疲勞、援軍の遲緩を打算

して、竊かに日記に記して曰く、カアツームは遠征軍の鼻先にて陥落せん、援軍はたい一足晩るべしと、斯く記したる時、ゴルドンは實に遠征軍の先鋒の已にメナムメーに達し居らずとも、少くも其附近にある可きを信じぬ、廿五日に到りて、英軍はメナムメーより猶二百哩を隔てバユダ砂漠を隔てたるアムブコルにありと聞きぬ、烏ぞ知らん、其もまた誤のみ、其實遠征軍はアムブコルより更に二百哩も彼方にあり、十一月三十日には唯一艘の小艇、三番瀑を過ぎたる迄にして、餘の六百艘は夥しき糧食の積荷を負ひて、猶千岩の胎をば寸進尺退辛ふじて上りつゝ、あらむとは。

十二月來れり、籠城より已に十月目となりぬ、外より傳はるは、來る來ると聲のみして終に來る可くも見へぬ、援軍の其處にあり彼處にありと云ふ定かならぬ風評のみ、滿城の士民今は待ち草臥れて、援軍の一語は胸に何等の鼓動も與へず、却つて失望を深からしむるの聲となれり、去

年十一月ヒックスの大軍全没の報カイロに傳はりしより、今茲十二月の初まで十三ヶ月の間に、埃及よりカアツームへ來りし使者の數は唯九人に過ぎざれば、カアツームは全く世の中に遠ざかりて宛ながら生きて幽界に移れる如く、間斷なき砲銃の響と乏しき食糧に塞れ果てい相會ふ軍民殆んど一人も人色ある者なし、幸に左右の腕とも持むオムダアマン岩及び北岩は未だ陥らざるも、兵員の脱走する者日に加はりぬ、十二月五日食糧の餘殘を精査して、印度稷約二萬二千片、ビスケット約三十三萬七千餘斤を得たり、四萬の士民に分與すれば、如何に吝むも、僅に三週日を支ふるに過ぎず、籠城日記の記事は日々に短かくなりぬ、九月には廿日間に密植せる印刷本にして八十頁を書き、十月には卅一日間に約一百頁を書き、十一月には卅日にして七十頁を書き、十二月に入りて日々の記事往々一頁に滿たず、其數節を摘せしめよ。

○十二月五日 余は殆どカアツームを救ふの望を絶ちぬ。

○六日 明日は余等が一連に苦艱心痛を忍べる二百七十日、九ヶ月の終なり……兵力不足なれば、余はオムダアマンと聯絡を通ずるの望を絶ちぬ。

○九日 (其日まで二百七十一日を経たるカアツーム籠城と、三百二十六日つゞきたるセバストーボル籠城とを比較して曰く)露西亞人は資金を有したり、余等は更に有せず。露人は熟練の士官を有ちたり、余等は有たず。露人は非戦闘士民を有たざりき、余等は四萬人を有す。露人は往來自由の路を有し新しき報知を有せり、余等は更に有せず。(著者云、更に一二を加へしめよ、露軍は同國同人種同宗教なりき、ゴルドンのカアツームに於ける異國異人種異宗教なりき。露軍は始終新手を繰りかへぬ、カアツームの籠城は隻騎の援兵を入れざりき。露軍の勇將謀臣は雲の如くなりき、ゴルドンは怯兵叛將盜吏懶官の中に唯一人なりき)

○十日 實に糧食問題の爲には、余も影法師となるまで憔悴しぬ、食物の要求始終絶ゆる時なし……今日五人脱走す。

(註)ゴルドンは落城の遠からざる可きを察して、其時の覺悟につきさまざまに思案しぬ。日記の一節に曰く、余は心中に考ふ、カアツーム落ち、總督府陥らば、督府に火をかけて一切灰燼とせむか、或は敵の俘となり、上帝の祐助によりて、信仰を維持し、己むなくば、信仰の爲め苦痛を受け——苦痛を受けむは必定なり——て忍ばむか……余は後者を採らんと。

十二月十四日糧食を調査して、印度稷五百四十アルデブ、ビスケット八萬三千五百二十五封度を得たり。以て十五日を支ふるに足らず。マアデは日一日より緊しく攻め寄せぬ。援軍の消息は杳として知る可からず。今はカアツームの陥落も旦夕を計る可からざる勢となりぬ。最後のたよりを出さむには斯一刻を失ふ可からず。

是於、ゴルドンは十二月十四日に到る籠城日記の巻を閉ぢて密封し、親戚故舊に訣別の書數通を認め、さきにメナムメーより書を齎らし來れる汽船ポオルデーン號に托して、之をメナムメーに送ることゝなしつ。萬端の準備は速やかに成りて、翌十二月十五日の拂曉、ポオルデーン號は最後の消息を載せつゝ、カアツームを出でぬ。

多年の友なるウルズリー卿に宛てし訣別の一書に、ゴルドンは斯く書きぬ。

最早斯世に於ては、御互に面會は出來まじく存候得者、小生死すども、家族の者にさわりなきやう吳々も御世話相願候。

(次ぎに英國外務省、埃及政府、伯耳義王等に對する負債四千五百六磅

(註、ゴルドンが英國を出づる時、囊中一錢も有たざりしより、ウルズリー卿二百磅を借り集めて、ゴルドンに渡し、ゴルドンは途中に其舊書記の老盲せるに會ひて、一百磅を與へて去りし事は、已に前に云ひぬ。其日より十二月十四日まで、此二百磅の負債は外務省の分千八百三十六磅、埃及政府の分二千一百磅と増しぬ。伯耳義王の分

五百七十磅は、其以前の負債なり。斯金額は大抵慈善用及び飛脚僮従の報酬等に仕拂はれたるものなりき。蘇丹雜費の中に編入してもよかる可きものまで。一厘も残らず引受けて、此最後の際に(懸々友人に頼めるなり)を明細に列舉し)

右の負債は、小生もと陸軍を退き、伯耳義王陛下に其賠償を願ひ(註、當時英國の軍制、下士官を除き、將校の官俸金を納めて購ふ仕組となり居れり。ゴルドンの分は六千磅程にも値るべし。ゴルドン自ら陸軍を退きて、伯耳義王の爲にコンゴに赴くこととなれば、其丈の賠償を伯耳義王より與ふるの契約ありしは前文に述べたり。援兵早く到り、各地の戍營を救助すれば可、其ま、棄置きてカアツームを去れとの訓令ならば、ゴルドンは辭職して二度と英國に歸らず、直ちにコンゴ地)て償却す方に去らんとは、つい其頃までゴルドンの念頭に歸りたる決心なりき)

るつもりなりしも、併し何もかも最早終りど相見へ候得者、我政府より小生負債の二千一百磅をカイロに、五百七十磅を伯耳義王に拂はれ、且小生の方へ受取る可き一切の俸給を以て小生が外務省への負債に宛てらるゝも、過分にはあるまじきかと考へ候、此儀は貴兄に於て定めて御世話下さるゝならん(下略)

(註、ゴルドンは猶ウルズリーに宛て、別紙を認め、アブツール、ハマ

ツドベールは、小生が蘇丹にて會ひたる極上の若者云々と推薦せり
 他の一友には、心靜かに事の此處に立到れるを叙し、我國人にして今少
 し其運動の次第を生等に通知するの用意ありたらんには、斯る始末に
 は到り申間敷、併し此は最早こぼれし乳なり、さらばと書き、英國なる其
 姉アウグスタには左の如く書き送りぬ。

此手紙は小生より受取玉ふ最後の手紙なる可く候。其は援軍の遲延
 に因り、小生等も退引ならぬ場合となりし故に候。併し上帝は萬事を
 支配し玉ふ、上帝は一に其榮光の爲め我等の福祉の爲めに支配し玉
 ふなれば、願くは聖意のまゝにあらんことを。(下略)

愛する君が弟

シー、ジー、ゴルドン

尙々神に謝す、生は頗る快活也、而してラウレンスの如く、生は吾責任
 を盡さんことをつとめたり。

(註) ション、ラウレンスは英人。印度太守として善政あり。印度の教主と稱す。一八一
 一年生れ一八七九年没す。ゴルドンの蘇丹を治むる、ラウレンスの治績に則る

所多かりし。吾責任を云々はラウレンスの語なり。つ
 とめの附點はゴルドンの施す所、其謹慎抑擲を見よ)

籠城日記は實に左の一節を以て結ばれぬ。

注意せよ、遠征軍——余は二百人以上を求めず——若し十日以内に
 來らずんば、カアツームは落ちむ。余は我國家の面目の爲め吾全力を
 盡しぬ。さらば、卿等は夥しき金を擁して然も一片の報知をだに送ら
 ざるよ。

第十三章

カアツーム籠城 (二)

援軍は何處にありし乎。

ポオルヂーン號が最後の消息を載せてカアツームを出でたる十二月十五日、遠征軍の先鋒隊はカアツームより陸路約三百哩水路約四百哩を隔てたるコルチーにありき。

面をあはせて相識らず最後の場合となりて初めて我閑却したる英雄男兒の面目を悟り得し英國民が且つ慙ぢ且ついらち速やかに速やかにと救援を促す聲は後にあり、前には眞に一日千秋の思をなして待ち焦れたるカアツームあり、九月十七日カイロに達したる八月廿七日附

ゴルドンの短信は、叛徒若し埃及人を殺さば、諸君は其血の責を負はざる可からずと苦言し、九月十九日ゴルドンより達したる電報は援軍の遅延を云ふ甚だ急あり、義理にも因循す可き場合にあらず、司令長官ウ
ルズリー將軍は一般命令を下して曰く、

急進の妨碍となる可き物件は夥し、然れどもゴルドン將軍及籠城兵の危きを願はば、誰か妨碍などに頓着する者あらんや、皇天の下、彼等の存亡は今卿等の手中にあり、如何なる事ありとも、我儕は之を救はざる可からず。

我大英國兵士よ水夫よ、斯上に最早多言を須ひず。

遠征軍一統其旨を領して、努力を吝まざりき、然れども所謂急進の妨碍物は一にして足らず、カイロよりアスワンに到る汽車の不完全、アスワンに於ける石炭の欠乏、大小行李運輸機關の軋轢、偕いよくナイルの溯航とありて一の瀑(アスワン附近)二の瀑(ワヂ、ハルファア附近)三の瀑(ドン

ゴラ附近の急灘奔瀨に六百餘隻の小艇を曳くの骨折、其他百般の妨礙に行程抄取らず、先鋒隊が此三瀑を過ぎて一部は小艇一部は駱駝水陸より進んで前記コルチーに達すれば、已に十二月十五日となりぬ。即ちゴルドン訣別の書をのせてボオルヂーン號がカアツームを出でし日なり。(十一月八日、ゴルドンの書翰遠征軍の手にとどきぬ、スチユアルト中佐遭難の報を確かめ、且つ遠征軍の到着する迄支ふ可き糧食あるを報ぜしなり。蓋しゴルドンは援軍の速力を餘りに信じ過ぎたりき。十一月廿二日には、援軍已にカアツームより約一百哩のメテムメーにありと思ひぬ、然るに約一ヶ月の後なる十二月十五日に援軍は猶カアツームより三百哩のコルチーにありき。援軍はゴルドンの抵抗力を信じ過ぎ、ゴルドンは已れに引くらべて援軍の速力を信じ過ぎ。此差が即ち悲劇の原となりぬ。)コルチーはナイル西岸の一村落、ナイルは此處より弓の如く曲り四の瀑(メラエの上流)五の瀑(バアベルの下流)バアベルを経てメテムメーに到り、陸路は弦の如くバユダ砂漠を貫きメテムメーに到りてナイルに會す。此れよりは一步踏み出すも敵地なり。十二月十六日總大將ウルズリ將軍親らコルチーに進んで、此處に全軍を集中する十有五日。十二月

三十日、軍を分つて二となし、ア、ル、將軍をして本隊を率ゐてナイルを溯らしめ、別にハアバート、スチユアルト將軍をして突貫隊を率ゐるバユダ砂漠を横斷してメテムメーに向はしめぬ。其翌々日一片の短信カアツームより達しぬ。カアツーム無事。十二月十四日、シー、ジー、ゴルドン、スチユアルト將軍の突貫隊は十二月三十日コルチーを發してバユダ砂漠にかゝりぬ。駱駝の匹數少なきが爲め、突貫隊は先づ一半だけコルチーメテムメー間の約半途に當れるジャクヅールに進み、清水湧くゲベル、ギリツフの岩邊に屯して、駱駝をコルチーにかへし、餘の一半を迎へ來らしめ、一八八五年一月十二日を以て突貫隊全部ジャクヅールに集中せり。然も十四日間の往復に三百哩を度り駱駝の足疲れたれば、こゝに三晝二夜の休憩をなし、一月十四日の夕全隊ジャクヅールを出でぬ。斯くて十七日には、アブ、クリアの井邊に於て初めて亞刺比亞勢と戦ふて之を破り、同十九日グバットに於て再び敵軍の襲ふ所となり、激戦

して又之を破りしが、此戦にスチユアルト將軍敵彈を蒙りて終に死しぬ。二十日の夕、全隊進んでメテムメーの南三哩、ナイルの西岸に集中し、翌廿一日の朝、かねてゴールドンが遣はし置きたる四艘の汽船と初めて聯絡をつけつ。去年九月三十日、援軍來の報に接して、其を迎へむ爲めに來りし以來、斯等の汽船はメテムメー附近に援軍を待つ實に一百十二日に及べるなり。斯日一小紙片に走り書きせる左の短信傳へて援軍の手に入りぬ。カアツーム無事、數年は支へ得。十二月廿九日、シー、ジー、ゴールドン(註、一説には此れわざとマアサの手に入れて欺かむ爲と云ふ。また一説には、カアツームの兵員糧食の實情をマアサがよく知り居るはゴールドンの知る所なれば、假令此短信敵の手に落つるも却つて援軍の心を緩ふするの利あればマアサも此使者をば放ちやる可く、されば陽には此短信を傳ふる眞似して實は援軍に會せる上右の短信とは全く裏はらなる危急の報を)口頭にて傳へしめんとの計略なりしなるべし。

援軍一隊已にグバット(メテムメーの附近)に着きぬ。此れよりカアツームまで水路一百哩、敵は陸、此方は船の戦をなしつゝ、行くなればと大事

を取つて諸般の準備を整ふること三日。一月廿四日の朝、二隻の汽船、サア、チャールス、井ルソンの指揮するサツセックス聯隊の一部を載せてカアツームに向ひぬ。一百哩の水路なれども、半途に六番瀑あり、十二哩の間ナイルは兩岸盛り岩礁出沒する間を流るゝなれば、航程甚だ抄取らず。此瀬を過ぎ終りて、ツーチー島の北端に汽船の近づきしは、一月廿八日の正午に近かりき。嶋のはづれば、白ナイル、碧ナイル間に挟まれたるカアツームの初めて見ふる所あり。船は瀬を出で、廣々としたる長江の水を分けて、次第に嶋に近づき、船上の心は一齊に鼓動し、始めぬ。去月二十九日の日附ある一片の短信を受取りしより、カアツームの消息を聞かざるこゝに三旬無事なるべし、無事なれかしと船上の双眼鏡は盡く椰樹茂るツーチーの嶋越しに上流の方を望みぬ。果然カアツームは徐々に椰樹の梢より浮み出でたり。中にいちじるき平屋根の四角ある大建物は是まがふ可くもあらぬ。總督府なり。船上齊しく望み見て、息を

呑みぬ。督府の屋頭には、一旒の旗も翻らず、更に半時間過ぎぬ。船はツ
 ナー嶋の中程を掠めて、カアツームは一幅の書を披ける如く残りなく
 見へ来りぬ。然も督府樓上には猶旗の影もなく、待ちわびつらん城兵の
 歓迎のしるしだに見せず。左手の嶋よりも、右手の岸よりも、オムダア
 マン岩よりも、祝砲ならぬ砲彈銃丸雨の如く注ぎ來つ。汽船は猶しばしか
 アツームを目ざして進みぬ。見よ、其カアツームよりも盛に汽船を目が
 けて砲銃を發射しはじめぬ。歓迎はたゞ彈雨のみ。嶋の濱、河の涯、城下の
 砂地、市街、椰樹の蔭、何處を見るも異様の軍服を着、異様の旗を樹てたる
 異様の兵群集し、砲銃の響の絶間々々に夥しき勝鬨聞へぬ。
 わゝカアツームは陥ちたるあり。援軍は唯二日晚かりき。

唯一足晚かる可しとゴールドンの預言は不幸にも適中し、援軍の汽船が
 カアツームとメテムメーの間あるナイルの早瀬にひま取れる間に、カ
 アツームは籠城三百十七日にして終に陥ちぬ。斯は一八八五年一月廿

六日の曉なりき。十二月十五日の訣別の辞に、十日以内に援軍來らずん
 ば落城せむと、ゴールドンは書きたりしが、其十日は延びて實に四十二日
 の間カアツームは永らへぬ。

如何にして斯四十二日は過ぎたる乎。問ふ可き人は亡せぬ。ありしとす
 るも、記録は亡せぬ。誰か審かに斯六週間の夥しき苦心を告ぐ可き。請ふ
 余輩をして、落城の虐殺に一命を免れたる殘兵廝養の口より、キツチキ
 ル少佐の調査報告より、斯四十二日の經過の一斑を集めしめよ。

* * * * *

一八八四年十二月十五日、今はいよく、最期と覺悟を定めて、訣別の書
 をもたせ、汽船ポオルヂーン號を出し遣りし後、カアツーム城中は森と
 なりぬ。

過る九ヶ月を苦痛と云はゞ、今や苦痛の絶頂は來りぬ。差迫りたる困難
 は糧食問題なり。十四日の計算によれば、印度稷五四六アルデブ、ビスケ

ット八三五二五封度を剩しぬ。ポォールヂーン號を出し、後は、人毎に
 日々其糧を遞減したれど、貯は日々心細く減り行きぬ。外に出づれば焦
 悴せる市民小兒ゴルドンに縋りて食物を要め、援軍は未だ來らずやと
 促がす。援軍は實に未だ來らざるなり。十日の期は已に過ぎぬ。幾回か敵
 中を潜りて使者を出したるも、一人の返り報ずる者なく、また一人の來
 り報ずる者ありし。ゴルドンは日夕督府の樓上より双眼鏡をどつて北を
 望みぬ。前に云へる如く、總督府は高くカアツーム市街の上に聳へて、樓
 上よりは方十數哩の間、ナイルの水域一目の中に望む可し。日に幾回ど
 なく、ゴルドン、双眼鏡はナイルの行衛を追ひぬ。然も溯り來る汽船の影
 も見へず。朝々日は碧ナイルに金を流し、夕日は紅の球となりて白ナイ
 ル。彼岸の砂丘に沈めど、耳に絶へざるは敵軍の間斷なく發射する砲銃
 の響、眼に觸るゝは食を求むる民の色蒼き顔のみ、空望に明け、失望に暮
 れ、心痛に暮れ、砲聲に明け、して、一八八四年も終に、大晦日となりぬ。

一八八五年一月一日、籠城も已に第十一月に入りぬ。年來れども、援軍更
 に到らず。城中食已に竭きて、今は四萬に近き士民をはぐ、み難き場合
 となりたれば、一月六日、ゴルドンは遍ねく、城中の民(非戦闘員)に布告し
 て、マアヂの方へ行き、たき者は遠慮なく行き、て差支なき旨を諭しぬ。斯
 許を得て、饑に惱める士民の大半は城を出で、マアヂに降りつ。ゴルド
 ンは親しく書をマアヂに送り、吳々も斯等降民の上を頼み、聞てへ、同
 宗旨の者共にもあれば、何卒十分に食物を與へ保護せられたし。と懇々
 云ひ送りぬ。去年九月の調査によれば、城中の士民の數は三萬四千に上
 りしが、斯日より約一万四千となり。

城中の人數は今や半を減せり。然も食は得可からず。援兵も來らず。敵は
 日々新手を入れかへて攻め寄せぬ。十三日には頼み切りたる白ナイル
彼岸のオムダアマン砦固守三百〇四日にして終に陥りつ。カアツーム
 は右の腕を截り落されぬ。今は瀛船を白ナイルに進むるの望なきに到

れり。同十八日、マアヂの一軍近々と南面の守備線に寄せたれば、ゴルドン直ちに突撃の號令を下し、劇戦一場、味方は二百人を喪ひ、敵も夥しく討れぬ。斯一戦はや、城兵の氣を振はしたるも、マアヂよりも更に恐る可き敵は今容赦もなく進撃し來りぬ。已に士民の半數を減じたるも、糧食竭きて已に二週餘日、驢馬、犬、猫、鼠、麩を初め動物と云ふ動物はどく食ひ竭して、今は靴の革、寢臺などにつけし革紐の類、椰樹の纖維を搗きて、まがひのパンにつくりしもの、マイモサ樹の脂などを食し、戦闘員は特に日々少量の護膜を與へられぬ。餓は規律を乱りて、堪へ兼ねたる兵士の其立場を去りて、餓鬼の如く食物をあさる者あれば、跣跣として起つ能はざる者も少あからず。然もゴルドンの勇氣は終に撓むを知らざりき。既に三百餘日間斷なく心身を碎いて、此期に臨み精神衰へず、盛年頻に死を希ひたる其れに引易へ、今は死を眼前に眺めつゝ、百年も生く可き勇をふるひ、晝となく夜となく守備線を見廻はりては、士卒の肩をた

たいてよく辛抱するぞと譽め、援軍近きにありと勵まし、病院を見舞ひ、汽船を檢分し、憔悴せる子女を慰め、重立たる市民と計議し、また樓上に歸つては、双眼鏡をあげて懲りすまに援軍の來可き方角を望みつ。此前後數週の間は、晝夜共に一睡もせず、身を百分して城中に滿たしぬ。

然れどもカアツームは已に力竭きぬ。一月廿三日、麾下の將校、フアラアバシア來りてゴルドンに降を勧めつ。フアラアはもと奴隸ありしを、ゴルドンの爲めバシアに取り立てられ、曾て一たび叛逆の廉によりて死刑と定まりたるを、ゴルドンは宥して猶これを使ひしなり。此バシア日頃マアヂと通じ居り、今平然と來りてマアヂの提供せる降伏條件を述べ、降をゴルドンに勧めぬ。ゴルドン勃然として怒自ら禁せず、拳をあげて打擲し、無禮を叱す。フアラア憤然、他の諸將校の仲裁を聽かず、突と立つて總督府を出で去りぬ。苦しき日は移つて一月廿五日、援軍の先鋒隊がカアツームへ向けメテムメーを出發せし翌日となりぬ。斯日、ゴルド

シ微恙あり、重立たる市民數輩しばしば來りて總督府を訪ひ、援軍來らず、食物また竭き、到底望なきを以て、寧ろカアツームを擧つて降るに若かずと勸む。然もゴルドンは反復之を慰諭し、一息存せむ限り決してカアツームは人手に渡さざるの決心を斷言しつ。斯く炎々たる主將の意氣に、降伏の沙汰は爐上の雪と消へたれど、奈何せむ、命と頼む護膜椰樹の木粉の類すら今は乏しくなりて、二萬の軍民精根已に竭き果て、市民は家に喘ぎ、戦闘員は守備線に銃を杖つきつゝ、ともすればふらく、睡り去らんとし、倒れて起つ能はざる者其數を知らず。力盡きて、實に一吹の風を待つ燈火の有様となれり。斯くて籠城より第三百十七日の日は西に沈み、上弦の月さしのぼりて銀波ナイルに湧き銀光靜かにカアツームの四野を照らし、が午前一時(一月廿六日)となれば其月も落ちて、カアツームは闇に入りぬ。

夜は深けぬ。砲聲は止み、夜を警むるたき火は燃へさがり、城兵は疲れき

つてうとく、まぜろみ、ナイル大江の音のみ夜すがらせよみぬ。

忽焉、闇よりも黒き一團、叢雲の地を這ふ如く、黝然とカアツームの守備線に押寄せぬ。

マアヂが軍の寄せたるなり。

是れより先き、マアヂは一月十七日援軍の先鋒隊がアブクリアに於て大に吾部下の一部隊を破り、已にメナムメーに達せるの報に接しぬ。斯は實に由々敷大事なり。援軍の來着も最早五六日を出でざる可し。今に於て大舉カアツームを陥れず、何れの日をか待つ可き。即ち諸頭領を會して大攻撃の策を定めぬ。部下のバッガアラ族及鬪を好む諸族、また皆アブクリアの戦に負傷戦死したる仲間の四五日來續々本營に送らるゝを見て、烈火の如く激し、速かにカアツームを攻陥して斯鬱憤を霽さむと、いさまたつゝ、進軍を促してやまず。於て一月廿六日の曉を期し、カアツームの南面(即陸地つゞきの方面)守備線の東端なる碧ナイル河畔

のブーレー門、及び其西面即ち白ナイル河畔のメスサラミエー門、此兩門より同時に進撃する手筈を定めつ。

上弦の月は落ちぬ闇に乗じて一軍は悄悄地ブーレー門外に押寄せ、一軍は白ナイル河を渡つてメスサラミエー門外に逼れば、午前三時を過ぐるまさに三十分、墨よりも濃き曉闇は寄手の運動を隠して、カアツムは夢にも其れど知らず得たりと寄手は東西一時に猛然と立ち上り、魚貫して守備線に迫りぬ、駭かされし籠城兵が蹠踉起つて銃をとる暇もあらせず、メスサラミエー門に向へる一軍はかねて用意したるわら東、柴の類を濠に投げ入れ、忽ちに其上を渡つて壘壁を攀ぢ、雪崩の如く漲れば、餓へ疲れ其上に不意をうたれし城兵は支へ兼ねて崩れ立ち、寄手は忽ち守備線内に込み入りぬ。ブーレー門も支へずして降りつ。

(ゴルドンに降を勧めて打擲されしフアラアバシアがマアヤと謀じ合せて門を開き寄手を導きしとも云ふ。確たる事實は分明ならず。フアラアは其まゝ敵に降りしが、落城後三日引出されて官金の在所を問はれ、答ふる能はざりし。元來官金は已に竭きて居たりしなれば。)よりマアヤの爲に殺されて、淺蘆しき最期を遂げぬ。一た

び守備線を乗取れば、カアツムは早や手中のものなり、逃ぐるを追ひ、手向ふ者をば殺しつゝ、寄手は勢に乗じてカアツムの市中に乱入し、手當り次第に虐殺して、總督府の附近に到れば、夜はほのく、と明けぬ。勝誇りたる寄手は一齊に銃を揮ひ、足踏鳴らして、夥しき関を揚げたり。

あゝカアツムは陥ちぬ。ゴルドンは何處にありし乎。前日來病みてありしゴルドンは胸にこたふる騒がしき物音を聞く。ひどしく蹶起して、督府を出で、士官二名、兵卒僕從二十名ばかり引連れて、塊地利領事館に隣れる會堂の方へ急ぎぬ。斯會堂は督府の東にあり、一區の空地を隔つ。數ヶ月前カアツムの豫備兵庫として、附近の家屋を取り拂ひあり、落城の曉には、此處を最期の戰場となす可し、かねて不言の中に定められき。

ゴルドンは眞先に立つて、此會堂へど急ぎぬ。蘇丹の夜はほのく、明け、碧ナイル河畔の黒き椰樹の梢に日の出を告ぐる紅の光さしぬ。勝つ

者の雄たけび、負くる者の叫び、銃聲にまぢりて四もに起りつ。一行は無
言に急ぎぬ。行く十數歩、忽ち横手の巷路より敵兵ばら／＼とあらはれ
來つ。はの白き曉の光に、敵味方踏ど、まづて互に顔見合せしが、やがて
敵の銃口あがり、火閃めき、而して銃聲響けば、ゴルドン已に蘇丹の土に
伏しぬ。

第十四章

不死の死

斯くの如くしてカアツームは三百十七日の籠城の後陥り、斯くの如く
にしてゴルドンは其五十二年の生涯を終りぬ。(一八三三年一月廿八日に生
に唯一日缺けたるなり)頭は切りて、オムダアマンの本陣に送り、マアヂの
實檢に供せられ、骸は督府の門前に横はりて、人眼に曝らされつ。埃及に
於ける英國民の失行を嘆じて、斯等の横逆は唯血によりて滌がるゝを
得べしと云ひ、(一八八三年の末)願くは皇天我國民の罪を問はず、上帝
の怒偏に基督に隠るゝ余一人の上に落ちむことをと祈り、(一八八四年三
月四日カアツ
ーム書翰)しが、今や其祈は應へられて、罪なきゴルドンの血は罪ある英
の一節

國民に代つて蘇丹の土に澆がれぬおくれて來りし援軍は終に其犠牲の生命を救ひ得ざるのみならず、遺髮の一片をだに收むる能はざりき。生きて名を求めざりしゴールドンは、死して形骸を國民に遺さざりしなり。前六年、後一年、其愛を吸ひ、其勞を吸ひ、其苦を吸ひ、果ては其血をも吸ひたる蘇丹の黃砂は、千載永く其俠骨を含みぬ。

(註) ゴールドン 最期の模様につきては、精確なるを知り難し。唯一、キツチ チル 少佐の報告に、自らゴールドン 最期の目撃者と云ふ土人の話を載せて曰く、

騒がしき物音聞へたれば、それがしは主人の驢馬を牽き、主人諸共總督府へ參りぬ。督府の外門にてゴールドン バシア の出で來玉ふに會ひつ。モハメツド、ベ、モスタファ、主人 イブライム、ベ、ラツクデー 及び兵士二十名ばかり ゴールドン バシア と打連れ、會堂の近くなる埃國領事 ハンセル の宅の方へ參る時しも、督府の外門のはどりなる廣辻に

て若干の叛徒に會ひぬ。ゴールドン バシア は一行を従へ、眞先に歩み居玉ひき。叛徒は一齊に射撃し、ゴールドン は直ちに斃れ玉ひぬ。兵士九名、イブライム、ベ、ラツクデー 及び モハメツド、ベ、モスタファ も斃れぬ。餘は奔り去れり云々)

カアソーム の陥落後、血に渴したる マアヂ の軍は六時間の虐殺を行ひたり。埃及兵、バシバゾク 兵、シャツギエ 兵約五千餘人は降伏して兵器を奪はれたる上に殆ど残りなく虐殺され、黒人兵は抵抗する者を除くの外、宥されて マアヂ の軍に加へられぬ。残れる程の白人は一人も残らず屠られ、市民の命を落す者四千人、餘の男子は盡く資財を剝ぎて追ひはなされ、婦女は分捕となりて死に劣る生を保ちぬ。敵軍若し埃及人を殺さば、諸君は其血の責を負はざる可からずと ゴールドン の苦言は、終に甲斐なかりしなり。

カアソーム 陥落後二日にして、援軍の先鋒 サア、チャールス、井ルソン は

二隻の汽船を浮べてナイルを溯り、ツーチー嶋の邊に到り、敵兵カアツ
 ーム及其四邊に充滿するを見て、援軍の已に晩かりしを知り、匆々に下
 りて司令長官に急報しつ。偵察小團數回の後、今はゴールドン死しカアツ
 ーム落ち事亦爲す可からざるを見て、ウルズリー將軍は程なく軍を還
 へしぬ。遠征軍はゴールドンの要求たりし蘇丹戍兵の救援を成し得ず、ま
 た英國民の熱望たりしゴールドン自身の救援をも成し得ずして、空しく
 歸り去れり。

カアツーム陥落後數月にして、マアヂは病むでオムダアマンの本陣に
 死しぬ。爾來蘇丹は黒雲紛々の中にある十四年、一八九八年に到り、當年
 ウルズリー遠征軍の一少佐、今は精悍無比の良將として名高きキツチ
 テル將軍、ゴールドンの最期、落城より十四年ぶりにカアツームを恢復し
 て、蘇丹討平の功を奏し、蘇丹は再び埃及の管下に復しぬ。此が爲に英國
 が前後費やしたる血と金とは實に夥しきものあり、一八八四年四月十

六日、カアツーム籠城の初、ゴールドンが在カイロ府英國全權委員に打電
 して、今に於て援兵を送らずば、將來必ず非常の困難を以てマアヂを挫
 く、己む可からざるに到らんと預言の一句は、恐る可き事實となつて
 顯はれぬ。

* * * * *

一八八五年二月六日、カアツーム落城、ゴールドン行衛不明の報は、晴天の
 霹靂の如く英國に落ちたりき。

如何なる物質的の世にも、如何ある物質的の國民にも、人心の存する限
 り終に磨滅すべからざるは英雄崇拜の一念なり。カアツーム籠城以來、
 英國民がゴールドンに對する嘆美愛慕の情は日と共に昂じて、今は燒點
 に達しぬ。日々千萬の眼は燃ふばかり遠く阿布利加の空を望み、千萬の
 頭は俯して援軍の着くまでゴールドンと其カアツームの無事あらむこ
 とを禱れり。

其初蘇丹に赴く途中より、ゴールドンは英國民
 に寄語して、「願くはわが爲に祈れ」と云ひぬ

アブ、クリアグバット

に於ける援軍の勝報、ゴルドンの汽船メテムまで出迎へ居たる事、カアツーム無事との短信とゞきたる事、あとの吉報英國に達せし時は、人々相慶し、最早今頃はゴルドン、ウルズリーの兩將互に手を握つて居るならん、次の電報はゴルドン無事、カアツームの國全く解けたりと云ふ吉報を傳ふるならむと、安堵の息をつきぬ、何ぞ圖らむ、次の電音は、城落ちてゴルドンの行衛知れず、多分は虐殺の數に漏れざりしならん、との兇報を傳へ來らむとは、

猶絶望の中に覺束なき一縷の望は繋かれぬ、一説には、カアツーム落ちたれ共、ゴルドンは猶殘兵を率ゐて要害の會堂に楯籠り居るなりと云ひ、一説には俘となりてマアヂの陣中に幽せられ居るにはあらずやと疑ひ、また他の一説はカアツームを脱れたる兵士の話に、汽船イスマーリア號は落城の前夜まで晝夜蒸氣を焚いて居たれば、(思ひ棄て、猶援兵の近きを感じ、ゴルドンは、援兵來着の上、若し敵中に入れる他の諸成營を救援せず此ま、カアツームを引拂ふこと、ならば、當初の決心の如く再び英國に歸らず、直ちに汽船に乗りて赤道

地方に去らん覺悟にて始終イスマーリア必定ゴルドンは此汽船にて白ナイ號に出帆の用意をさせ置きしなるべし。) 必定 ゴルドンは此汽船にて白ナイ號を溯り赤道地方に免れしあらんと望みぬ、然も兇報續々傳はりて、今はゴルドンの死を疑ふ餘地なきに到り、張りつめたる國民の心痛は失望となり、落胆となり、悲哀となり、翻つて悲劇の原因の追究とあり、遠征軍に對する不満とあり、(先鋒隊がゴルドンの遺はし置きし汽船に乗りてカアツームに向ふ前に、メテムに三日滞留せし一事は、殊に非常なる争論の原となれり) グラッドストーン政府に對する夥しき憤激怒號の聲となり六十餘年の公生涯に如何なる大事件に會するも寢室の戸を入れば死魚の如く熟睡すと誇稱したる老偉人をして、數宵の間終に眠る能はざらしめたり、蘇丹問題は非常の劇烈なる争論問題となりぬ、然も蘇丹の救済に斃れし其人に對する感情は、上下内外、全國を通じ、また新紙を讀む程の世界の國民を通じて、皆一轍に出でぬ、

英國女皇は書をゴルドンの愛姉アウグスタに賜ふて曰く、

親愛なるゴルドン嬢よ

朕は如何にして御身に書く可き、如何して朕が感ずる所を表せむと
 試む可き！高潔、英勇、眞に世界の教訓たる可き献身の精神をもて、如
 何にも信實に如何にも勇々しく國家の爲め其女皇の爲めに盡した
 る御身の愛弟が救はれざりしは如何にぞや、救援——朕は御身の愛
 弟に行かんことを請ひたる輩に向ひて幾度か——問斷なく救援を
 促しぬ——の約果されざりしは、朕にとりて實に云ふ可からざる悲
 哀！斯は眞に、朕を病ましめぬ！愛弟の爲めには非常の心痛をせら
 れ、また愛弟に對して至當の愛を注ぎし御身、彼の姉妹ある御身を思
 ふて朕が心、血を嘔くの思あり、御身等皆實に善良忠信、非常に堅固の
 信仰をもたるゝなれば、愛兄弟の死に關する確證の存せざる——然
 も朕は其甚だ疑ひなからむことを恐る——今日も猶よく忍ぶを得
 らるゝならむか、其内朕は再び御身に會ひて、朕がこゝに表する能は
 ざる所を盡く御身に告げむことを望む、朕が娘ビアトリスもまた朕

と感と同ふし、御身に對する最深の同情を表せむことを願へり、朕は
 外國より夥しき吊哀同情の辭を聞きぬ、朕が長女皇太子妃(註、即ち先
 頃崩せられし獨逸皇太后)及び朕が従弟伯耳義國王より殊に切なる
 吊辭に接しぬ、幸に朕が爲め御身の諸姉妹及び長兄に朕が眞實の同
 情を表し、且つ朕が御身の愛弟の勇々しどは云ひあがら、實に無慘の
 運命につきて、我大英國に残されたるの汚點を痛感するを告げよ。

親愛なるゴールドン嬢よ

誠實に且同情を表して朕は常に御身の

一八八五年二月十七日オスホルン宮に於て

并クトリア女皇

エストミンスタア寺院、聖保羅寺院、其他本土殖民地の別なく大英帝國
 を通じて、到る處の會堂寺院にはゴールドン記念の禮拜行はれ、人々心を
 一にして其悲壯の死を哀み、不言の遺訓に胸をうちぬ、紀念碑も數多建
 てられしが中に尤もゴールドンの意を得べく思はるゝは、グレグゼンド

(即ちゴールドンが六年間工兵大佐として在留中)貧兒救助資及び國立ゴールドン貧兒救助其他の慈善事業に熱心したる所なり) 貧兒救助資及び國立ゴールドン紀念育兒院の創立なりき、右の爲倫敦府知事の手許に集まりたる義捐金は二萬磅(約二十萬圓)以上に及び、清國皇后李鴻章の名など寄附者の中に見へたり。

斯くてゴールドンは死して限りなく生き、世界の英雄傳は新に一の不朽なる姓名を添へぬ。



神の武夫、人の友、此下に葬られず
何處にか遠く荒寥たる蘇丹に死せど、
汝は萬人の心に生く、そは此世界は
汝にまさる質朴高尚の人を生まざりきと人皆知れ、ば。

(テニソン作ゴールドン碑銘の大意)



盡きの記憶を後に殘して、君は逝きぬ、
死しても君は生けるが如く、
貧者の富となり、落膽者の望となり、弱者の力となりぬ。
君は能く失望を知らざるの魂して望なき患難に處し、戦慄者に力を吹込みぬ。
支那の國君は君が恩を謝す可きなり、古帝國の位は(君によつて)覆らざりき。
而してナイルが岐れし流勢を一に合はする所、一の都府は君が耐久の苦を見ぬ、
大勢の人は其處に住みたれど、終年其處を守る勇は獨り君が勇なりき、
血に満く槍をあげ、めぐりて其都府を喰はむとせし亞刺比亞勢に向ひて、日
も夜も君は守りを警めぬ。
君が死は軍神の所爲ならず、君が友等の脆かりし故ぞ。
君が故國の爲、萬人の爲、神は君が手の働を恵み玉へり。
いざさらば、潔白の武士!
いざさらば、百勝の英雄!
君は生く、生きて後の世に教へなむ、無窮の父の仰せを樂めよ。

(グラスゴー大學教授セツプの書きし碑銘の大意)

ゴルドン書翰拔萃一二

◎余は世事一切上帝の大經綸の一部なりと信ず、上帝は萬國萬民を平等に愛し玉ふを信ず、上帝は全く公平にして偏愛なきを信ず。余は、乙國民如何にねくれたりとして、甲國民は乙國民よりも好しとは思はず。余一箇人にとりては、上帝が我々を殊寵し、我々をして他の國民にまさらしめ玉ふを願ふ、然もまた翻つて其然るを願はず、何となれば上帝若し國民を偏愛し玉は、個人をも偏愛し玉はんが故なり。

◎余は望む、人皆死は我儕を此試鍊の世界より眞の故郷に連れ行く愉快の友とするに到らむことを總て我儕の悲哀は斯大眞理の忘却より來る。

◎人は實を結ぶ前に先づ世間の事に死せざる可からず、此は無論なり。然らば世間の事に死すとは何ぞや、馬鹿、空想家、始末におへぬ男、空論家、無鐵砲者、(外見より)惡を赦す者、熱中家、凡庸漢などと算せらるゝあり。

◎我儕は、ピアノなり、事件は我儕を彈ず、人生の事に於ては、グラッドストーンも我儕より重要ならず、重要なるは、彼が彈せらるゝ時如何なる舉動をなすかにあり、病蔭にある婦人と雖ども亦斯くの如し、天使と大能とは彼女にもグラッドストーンにもひとしく注目す、二つながらひ

どしく興味あり、彼コップの破れたるは此愛蘭の騷擾と同じきなり。

◎精神も食なきを得ず、而して若し靈的の物を食せざれば、必ずや肉、的の物を食す、我儕の恐ろしく懶き、屈托がちなるは君の知る所あり、余に於ては、斯る靈的事物の研究はよく倦憊を防ぐ……余は一定の法を立つるを避けんと欲す、君は皿を見て、圓しと云ひ、余は之を見て、四角なりと云ふ、君若し君が見解に安んぜば、其見解を持せよ、余は余の見解を持せむ、他日我等共に眞理を見るの日來らん、余が斯く云ふは他なし、我等は兎角我思ふ如く思はざる人、我々に従はざる人を答むるの傾向あり、が故なり、我等自身すられぼろに見る所の事物に關して、何ぞ他を煩

はし他の心を擾すの要あらんや。其と同時に告白すれば余は世間一般の談話及び或宗教家の談話に對して嫌厭を催ふす。彼輩の語には一種「余は汝よりも神聖なり」と云ふ様なる風あり、余は好まず。故に余は斯様の人に對しては、斯様ある議論の入らぬ話題を擇ぶ。

◎余は明白なる色を好む、黒と白。余は決斷を好む。

◎余はエラキ人々よりも却つてエラクなき人々よりも多くの加勢を受けぬ、余はエラキ人々よりも寧ろエラクなき人々の手紙に答へまた加勢をなす(吾力及ばず)ことに注意す。余が老婢と共に茶を喫するの愉悅を與へむ爲めには、エラキ人の馳走を辞す可し。

(註) ゴールドンパレストアインのジャツファに滯留せる頃、土地の牧師の子なる者、ガザ電信局に奉職中、故無くして解雇されたりとて牧師は情をゴールドンに訴へけるに、ゴールドン答へて曰く、目下の所僕は埃及に一向勢力なく、埃及王も僕を厭ひ玉へり、併し子息をカイロへ遣は

し玉へ、其内せうにか世話し見る可しと。

程なくマアヂの大叛乱に際し、ゴールドンは蘇丹鎮撫の大任を帯びて英國よりカアツームへ急行する途中、カイロに着くや、彼牧師の子を忘れず、非常の急忙の中なりしも、自ら電信局に行きて、彼が爲めに然る可き地位を周旋し與へぬ。

◎ パレストアインより姉に寄せし書翰の一節。

「生は銃を國許へ送還致し候、最早銃獵も出来不申候。舞臺——朝、從僕生ける鷓鴣を一羽持ち來る。從僕は曾て生が一羽を買ひて放ちたるを知り居りし也。翼を縛りてあり、巢ごもり居しを獲しとぞ、目美しくかゝやき、嘴紅に、如何にも立派なる鳥ありし。生は氣を悪くし、もぎ取つて縛れる紐をさらんとする間に、鳥はもがき、羽たゝきて、斃れ候。生も死には馴れて、死は格別の損亡とも思はぬ事に候得共、此には頗る感にうたれ候。今も猶其感去りやらず候。兎に角、斯日より銃はやめと相成候。」

曾てジョン王註、アビシニア王の事の使節と會見の爲めカテリフに赴きし時の事を今も記憶し居り候。小生は路をあるさく、鞭にて蜥蜴をたゝき、其尾をうち切り候。其が今まで眼さきにすがり候。

小生は動物が再生して我々の惡業の賠償を受けんことを望み候。小生は動物も必ず再生するあらんと存候。兎に角上帝は正しく且やさしく處置し玉ふ可く候。

◎最後の蘇丹へ赴く途中其姉に寄せし書翰の一節

若し余の事を問ふ者あらば、人々の祈禱は余にとりて大なる助なるを告げ玉へ、余が世間的成功の爲めに祈禱を求むるにあらず、唯余の使命が上帝の榮光となり貧困不幸の民の福祉とならんが爲めに、余の爲めには、即ち上帝の聖旨のまゝにならんこと、殊に謙遜の心をもつ様に、一月廿一日地中海上にて)

余は今夜蘇丹へ立つ。余は頗る快活なり、余は斯く謂ふ、上帝若し余と共

にあらば誰かよく誰か肯て余を害せんと願くは榮光上帝にあれ。蘇丹の世界と民とに恵われ、而して此身は上帝脚下の塵となれ。一月廿六日
カイロより)

◎死者生也との余が見は、君の知り玉ふ所なり……余は我等の死するを信せざるものなり、我等は眠るのみ、而して來世にて眼を見開くも、其は我等に新奇の世界にはあらざる可し、蓋余は我等の前生を信する者あり、我等は唯上帝より離るゝは如何につらきものあるかを教へられんが爲めに、さもかくば知り得まじき神をいよく知らん爲めに、斯肉に入れられたるものと信する者あり……蓋信する者に死は元來何者ぞ、畢竟帷を隔てゝも常に共に在す上帝に一層密接する所以にあらずや。

ゴルドン將軍傳 大尾

明治三十四年十二月十六日印刷
明治三十四年十二月十八日發行

定價五十錢

著者 德富健次郎

東京市京橋區采女町廿四番地

發行者 福永文之助

橫濱市太田町五丁目八十七番地

印刷者 村岡平吉

東京市京橋區采女町廿四番地

發行所 警醒社書店

橫濱市山下町八十一番地

印刷所 福音印刷合資會社



德富健次郎著

東京民友社發兌

小思出の記 (七版)	郵定價六十五錢	トルストイ	郵定價二十五錢
小不如歸 (十六版)	同同 六十三錢	グラッドストーン (再版)	同同 四十二錢
自然と人生 (五版)	同同 四十五錢	コブデン (三版)	同同 四十二錢
青山白雲 (再版)	同同 四十五錢	ブライイト (五版)	同同 四十五錢
外交奇譚 (再版)	同同 六十五錢	探偵異聞	同同 四十五錢
名婦鑑 (再版)	同同 六十五錢		
歴史の片影 (三版)	同同 四十二錢		



傳記書籍目錄

○ナポレオン、ボナパルト	松村介石君著	郵定價四十錢
○アブラムラ古龍	松村介石君著	郵定價四十錢
○社會改良家	松村介石君著	郵定價三十錢
○人物論	松村介石君著	郵定價二十錢
○使徒保羅の傳	松村介石君著	郵定價三十錢
○シイザー傳	松本君平君著	郵定價四十錢
○リビングストーン	有島武郎君著	郵定價四十錢
○コロンブスと彼の功績	森本厚吉君著	郵定價六十八錢
○貞操路得記	内村鑑三君著	郵定價二十五錢
○美談	内村鑑三君著	郵定價二十五錢
○ルーテル傳	村田勤君著	郵定價四十錢

傳記書籍目錄

○古今仁人傳	○ガートフ井ールド傳	○ワシントン	○基督傳記	○基督傳	○新島言行錄	○薄命兒	○ムー！デの傳	○メレーライオン傳
村田勤君著	西武雄君著	漢北生著	竹越與三郎君著	ニコル大博士著 柏井園君譯	石塚正治君著	田中太郎君譯	戸川殘花君譯	ダツレー氏著
定價三十錢	定價二十五錢	定價八錢	定價二十五錢	定價七十五圓	定價四十錢	定價三十錢	定價二十錢	定價四十五錢

島田二郎君著	世界の社會主義概評	日本と露西亞	松村介石君著	修養錄	修養談	立志の礎	地人論	興國史談
定價、郵税 三十錢	四錢	卅五錢	四錢	四十錢	廿五錢	廿五錢	四十錢	五十錢

警世雜著	宗教坐談	平瀨龍吉君著	立志の源泉	英雄崇拜論	雄辯學	成功の秘訣
トマス、カーライル原著 住谷天來君譯				松本君平君著	島貫兵太夫君著	學生錦囊
三十錢	三十錢		四十錢	五十錢	卅五錢	三十錢

CL
NO. 62335

植村正久君著

靈性の危機

四十錢

信仰の友

三十錢

松尾音次郎君著

明心學道話

四十錢

幸徳秋水君著

廿世紀の快物 帝國主義

廿五錢

松村介石君著

天道

二十五錢

人道

二十錢

婦人のかゝみ

三十錢

岸本能武太君著

宗教研究

五十錢

倫理宗教時論

四十錢

内村鑑三君著

外國語の研究

廿五錢

宗教と文學

十六錢

後世への最大遺物

十五錢

求安錄

三十錢

島田三郎君著

如是我觀

近日發賣

小松 綠君著

策同



